



## 1. 計画の作成

### (1) 計画作成年月日及び計画期間

令和8(2026)年3月31日

本計画の計画期間は、10年程度を目安とする。

第一期10年程度を目途として保存活用整備事業を開始し、その後の事業進捗や活用状況の検証、運営に関する経験を蓄積するとともに利用者ニーズ等の実情を把握し、第二期としての追加整備の方向性を検討していくものとする。

上記の事業の進捗に合わせて本計画を見直すこととする。

### (2) 計画作成者

武蔵野市

## 2. 文化財の名称等

### (1) 国登録有形文化財(建造物)の名称等

#### 1) 名称および員数

旧赤星鉄馬邸 1棟

#### 2) 構造及び形式

鉄筋コンクリート造地上2階地下1階建、建築面積392m<sup>2</sup>、延床面積635m<sup>2</sup>、扉付コンクリート塀延長12.3m付

#### 3) 登録年月日

令和4(2022)年10月31日

#### 4) 所在地

東京都武蔵野市吉祥寺本町四丁目26番21号

### (2) 所有者の氏名及び住所

氏名(名称)：武蔵野市

住所：東京都武蔵野市緑町二丁目2番28号

### 3. 文化財の概要

#### (1) 文化財の構成

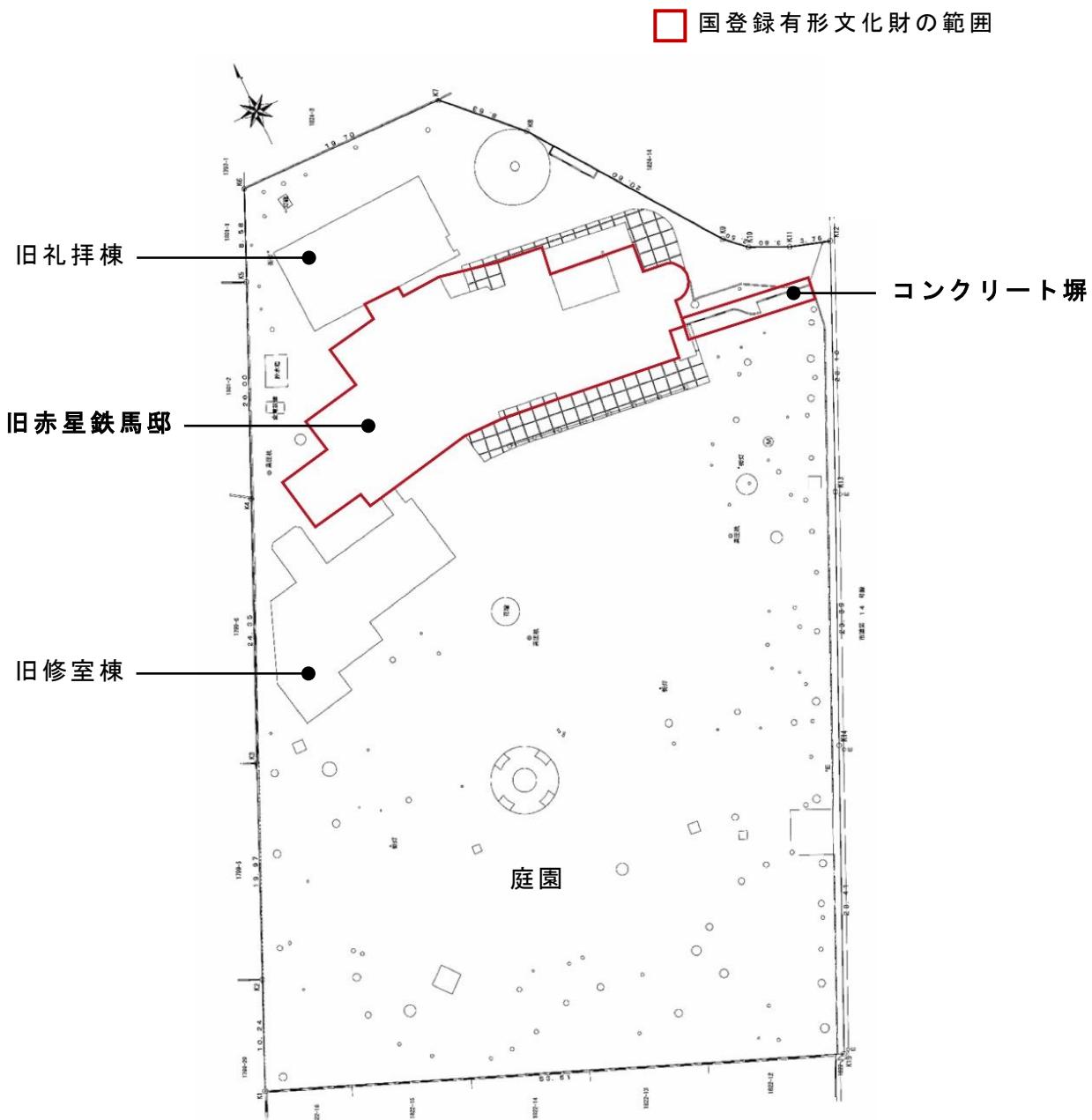


図1-1 文化財の構成

## (2)立地環境

### 1)立地の概要

旧赤星鉄馬邸は吉祥寺駅から徒歩圏内にあり、旧吉祥寺村の中央近辺にあたる吉祥寺本町の住宅地に位置している。



図1-2 旧赤星鉄馬邸の位置

国土地理院「地理院地図 Vector」  
(<https://maps.gsi.go.jp/vector/#13.066/35.70508/139.540763/&ls=vp&ale&disp=1&d=l>)を下図としてプロット

## 2)周辺の歴史

明治22(1889)年、町村制の施行に伴い吉祥寺、西窪、関前、境の4村と井口新田飛地が合併して武蔵野村が誕生した。

武蔵野村誕生以前は、現在の旧赤星鉄馬邸の敷地にあたる箇所は、吉祥寺村に属していた。寛文4(1664)年の地割を示す村絵図（市指定有形文化財「村絵図と野帳」）より、吉祥寺村の絵図をみると、周辺は、五日市街道に沿って短冊状の敷地が並ぶ地割であったことがわかる。測量図とは異なるため、現在の間口や敷地面積との厳密な比較は難しいが、当初の赤星鉄馬邸の敷地形状は、この短冊状の敷地割が継承されていたことが伺える。さらに、東側に接する通りは現在も残っていることがわかる。昭和3

(1928)年1月製図の「吉祥寺全図」では、通りを南に下った箇所に「五反通り」という名称が記されており、敷地の広さを示す単位が由来であった可能性もある。

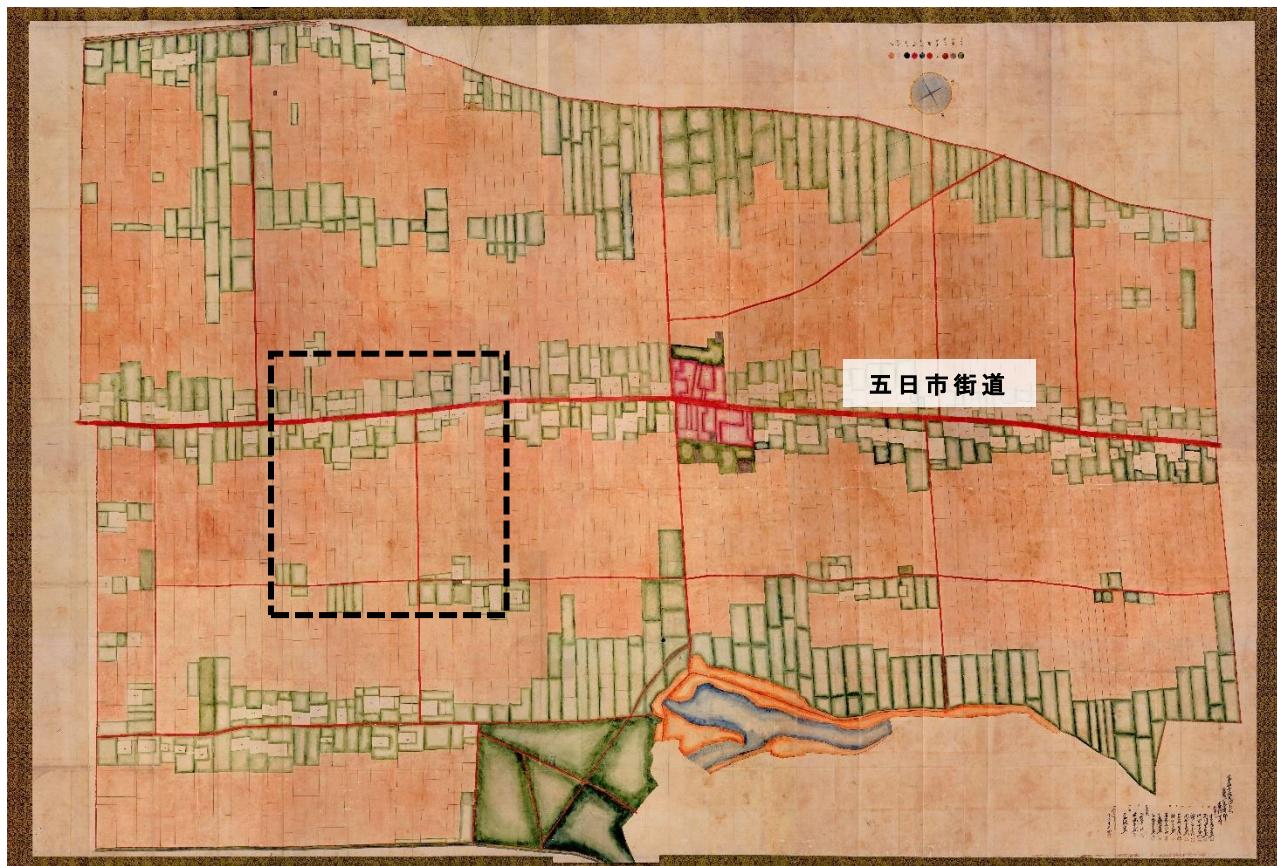
昭和3(1928)年、武蔵野村は武蔵野町となった。昭和13(1938)年に中島飛行機が武蔵製作所を開設し、太平洋戦争が始まると軍需工場として空襲の標的となり、周辺の民家も大きな被害を受けた。

昭和22(1947)年、市制の施行によって武蔵野市が誕生し、昭和37(1962)年には現在の町名が施行された。

旧赤星鉄馬邸の当初の敷地は北側が五日市街道に面しており、五日市街道を挟んで成蹊学園がある。なお、前述した東側の通りは、昭和14年9月5日発行「武蔵野町三鷹村番地入明細図」では「成蹊通り」、昭和18(1943)年12月測図の三千分一地形図では「成蹊南通り」との名称が記されている。

周辺は、かつて野口雨情、金子光晴、山本有三などの文化人が住んだ地域でもある。

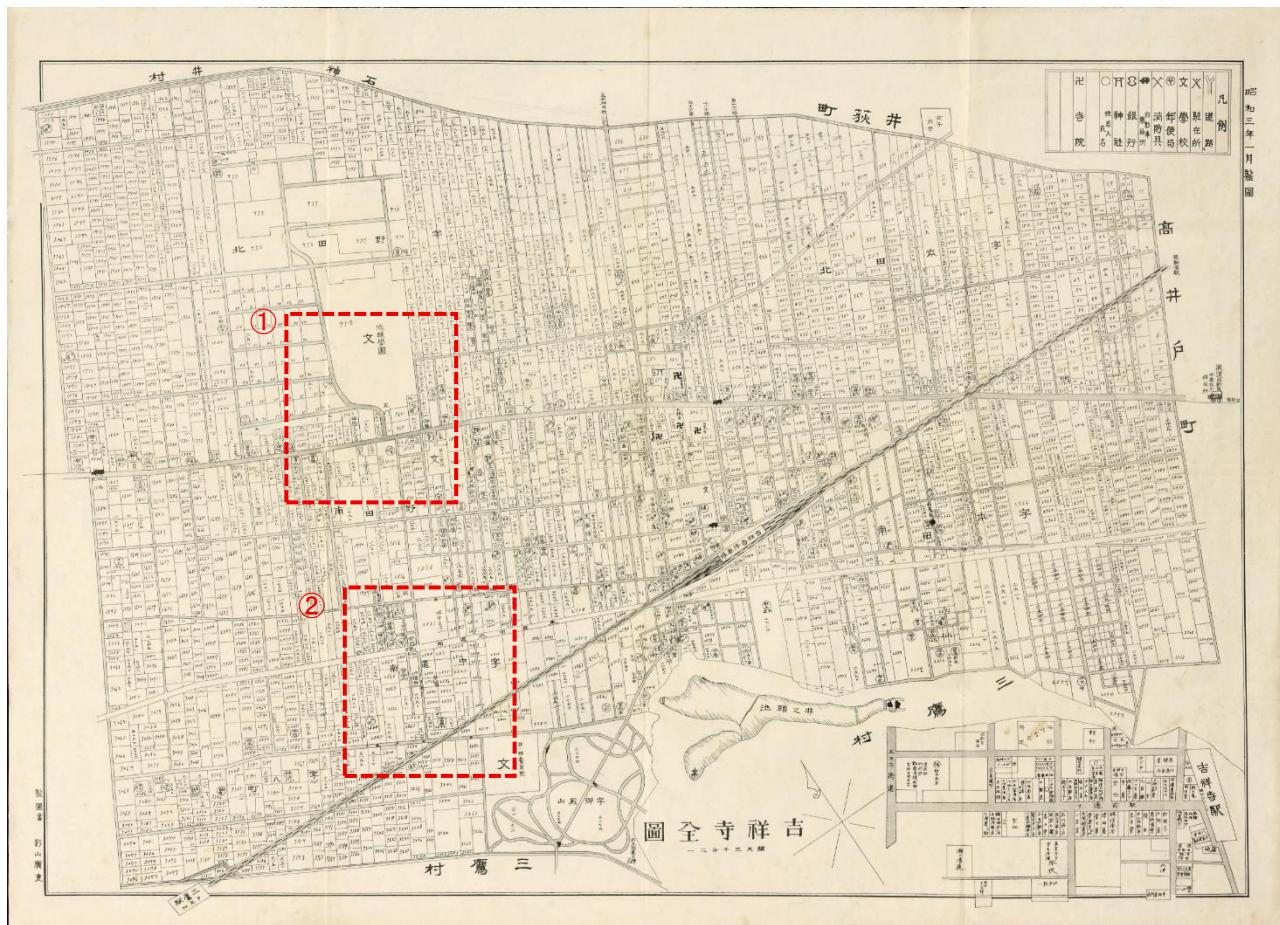
かつては五日市街道から短冊状に割られた広大な土地が広がっていた本地域であるが、自然環境等も時代に応じて姿を変えてきた。その後の宅地開発を経て小街区化が進み、現在では第一種低層住居専用地域として戸建て住宅や低層マンションが立ち並んでいる。



点線部分拡大

●が現在の旧赤星鉄馬邸の大まかな位置

図1-3 寛文4(1664)年の村絵図「吉祥寺全図」(武藏野市立むさしのふるさと歴史館所蔵)



①部分拡大



②部分拡大

図1-4 昭和3(1928)年1月製図「吉祥寺全図」(東京都立図書館所蔵)

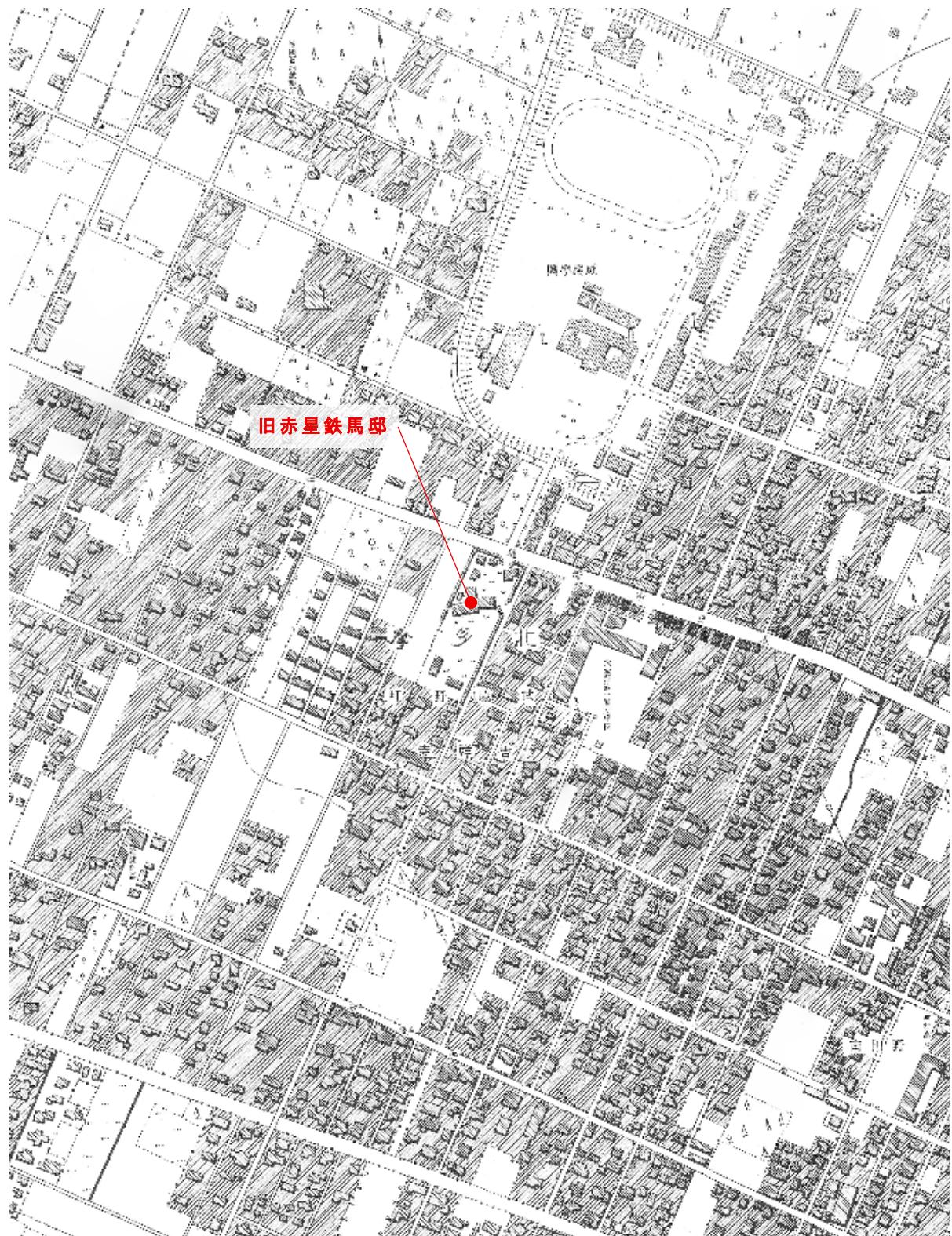
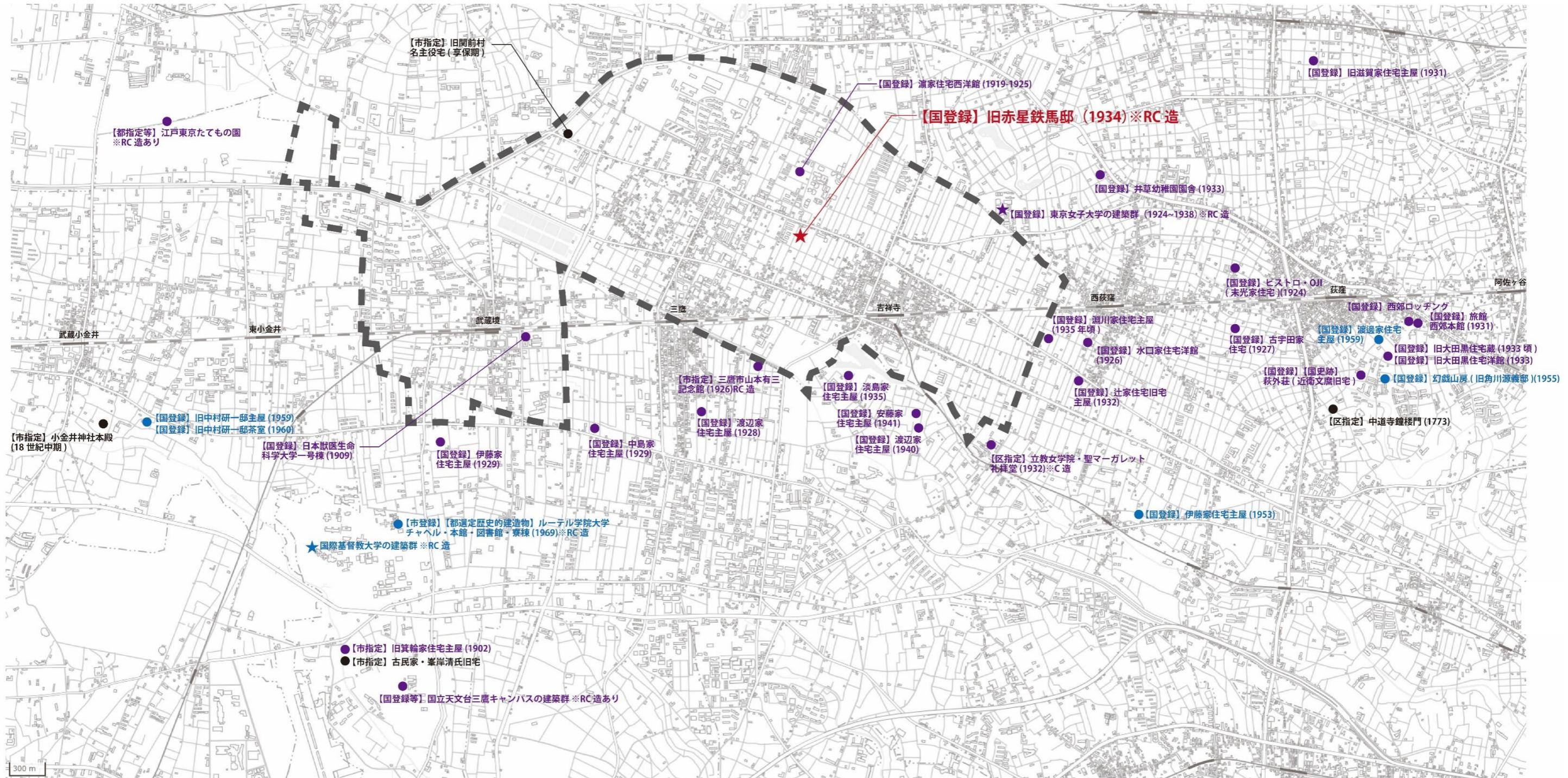


図1-5 旧赤星鉄馬邸周辺地図(昭和18(1943)年)

国土地理院「昭和18年12月空中写真測図 吉祥寺」をトリミング



紫 : 明治～戦前の建築  
青 : 戦後の建築  
黒 : 明治以前の建築  
※★はレーモンド設計・計画

図1-6 旧赤星鐵馬邸と周辺の文化財建造物(広域)

国土地理院「地理院地図 Vector」(<https://maps.gsi.go.jp/vector/#13.066/35.70508/139.540763/&ls=vpale&disp=1&d=l>)を下図としてプロット

### (3)沿革

旧赤星鉄馬邸は、明治から昭和に活躍した実業家である赤星鉄馬の自邸として、昭和9(1934)年にアントニン・レーモンドの設計により竣工した。

赤星鉄馬は、大正12(1923)年の関東大震災で、赤星家本邸としていた麻布区鳥居坂（現港区六本木）の邸宅が半壊した後、以前よりカントリーハウスを所有していた武藏野町に移り住み、レーモンドに邸宅の設計を依頼した。レーモンド本人のほか、設計に携わったことが分かる人物として、杉山雅則・小野禎三（構造担当）<sup>1</sup>、ノエミ・レーモンドが挙げられる<sup>2</sup>。

昭和19(1944)年に陸軍に接収されたとされる<sup>3</sup>が、そのことを明確に示す資料は見つかっていない。戦時中は、首都圏初の空襲以来9度の激しい空襲を受けた武藏野町内にあっても被害を免れ、昭和31(1956)年からカトリック・ナミュール・ノートルダム修道女会が修練院として所有・使用し、昭和54(1979)年には本邸に接続する形で旧礼拝棟及び旧修室棟を増築している。近年の施設閉鎖に伴い、令和3(2021)年2月に武藏野市が建物の寄贈を受け、土地は武藏野市土地開発公社が先行取得した。

本邸は、令和4(2022)年に国登録有形文化財となった。なお、令和2(2020)年にDOCOMOMO Japan「日本におけるモダン・ムーブメントの建築238選」にも選定された。

### (4)敷地形状の変遷

旧赤星鉄馬邸の敷地は、昭和9(1934)年の竣工時の配置図等によると、五日市街道に面しており、現状よりも南側が広く、敷地境界付近にはたくさんの木々が植えられていた。また、テラス前には芝生とバンカーと考えらえる砂の窪地などからなる庭園が広がっていた<sup>4</sup>。

その後、赤星鉄馬が子どもたちに土地を譲ったことで、概ね現状の敷地形状に近いものとなった。それぞれの土地が子どもたちに譲られた正確な時期は判明していないが、長女が17歳で結婚し、その際に結婚祝いとして南側の土地をもらい受けたとされる。長女の年齢等を考慮すると、昭和9(1934)年頃、本邸竣工よりは後のことと考えられる<sup>5</sup>。また、昭和12(1937)年には、長男が結婚し、これを機に鉄馬が北側に家を建てたという。その後、この家には次男が住むようになった<sup>6</sup>。GHQによる本邸の接収時には、敷地の北側に、この次男宅のほか、三男宅が建っていた。

昭和28(1953)年にはGHQの管理を離れ、親族等の所有を経た後、昭和31(1956)年にカトリック・ナミュール・ノートルダム修道女会が土地・建物を取得した。五日市

<sup>1</sup> 『アントニン・レイモンド作品集 1920-1935』（城南書院、1935）には設計担当者として杉山雅則・小野禎三の名が記されている。

<sup>2</sup> 「昭和初期モダニスト回顧録 レーモンド事務所の思い出 杉山雅則氏に聞く」（『SD 第286号』（鹿島出版会、1988））において、杉山雅則がインタビューに答えてノエミ・レーモンドが旧赤星鉄馬邸に関わったことを述べている。

<sup>3</sup> 与那原恵『歴史に消えたパトロン一謎の大富豪、赤星鉄馬』（中央公論新社、2024年）には日本陸軍による接収があったと記述されている。

<sup>4</sup> 本節（9）庭園活用の変遷において詳述する。

<sup>5</sup> 赤星鉄馬長女の子へのヒアリングより。

<sup>6</sup> 赤星鉄馬長男の子、次男の子ほか親族への合同ヒアリングより。

街道からの車による進入路を除き、概ね接収された範囲を取得しており、現在の土地形状に至っている。

かつての次男宅にあたる北側の一部・北東側は、現在は旧赤星鉄馬邸の敷地ではないが、当初のコンクリート塀が保たれている（後述の変遷図の赤い点線の部分）。五日市街道からの入口・アプローチがなくなった時期は明確ではないが、昭和 32(1957)年の航空写真では確認できる。一方、昭和 51(1976)年にはかつての三男宅にあたる位置に集合住宅が建っており、遅くともこのときには赤星家時代のアプローチは消失している。

## 1. 設計時

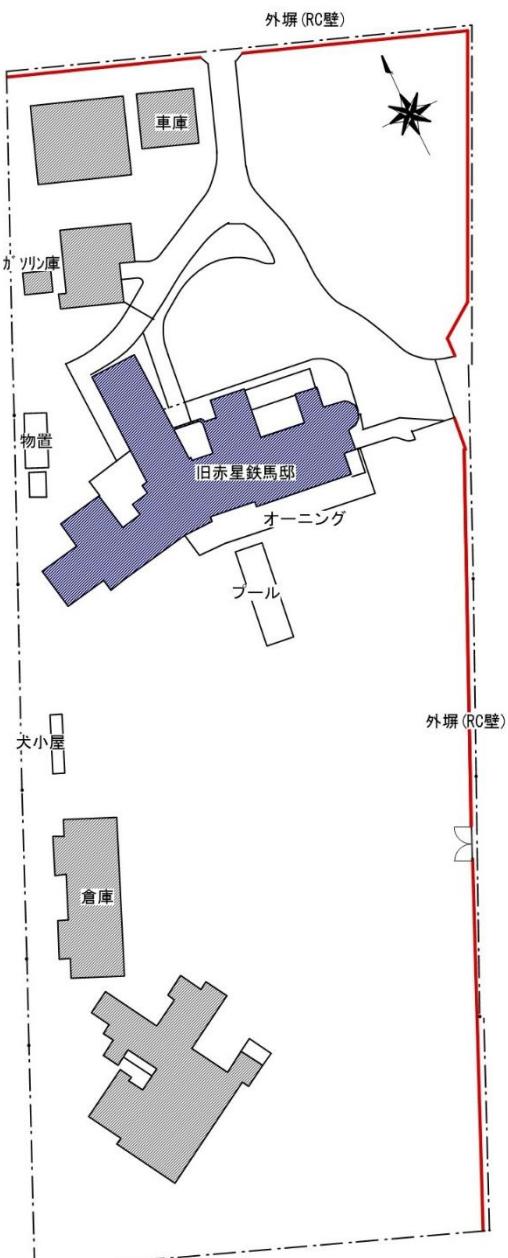
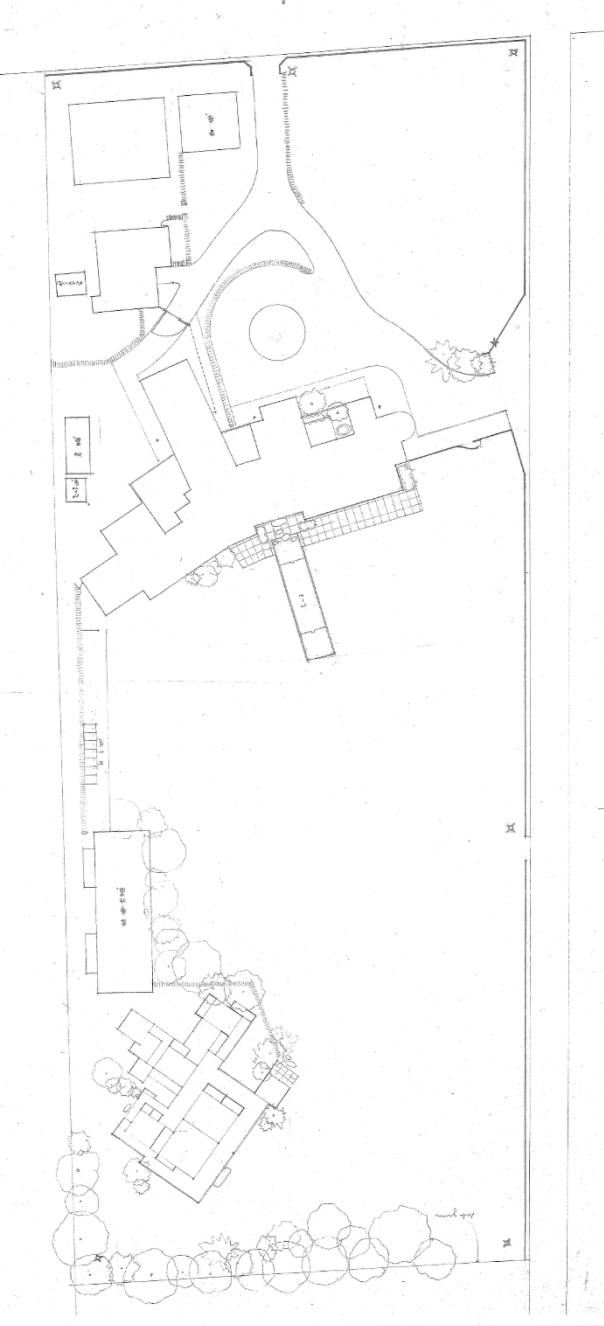
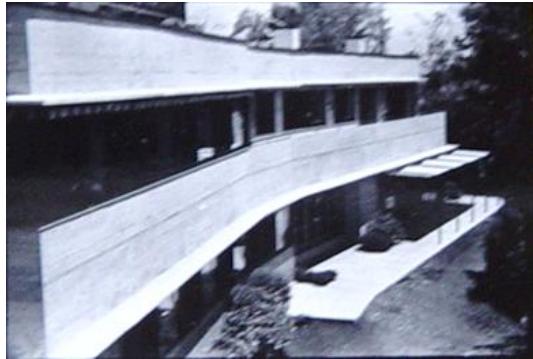
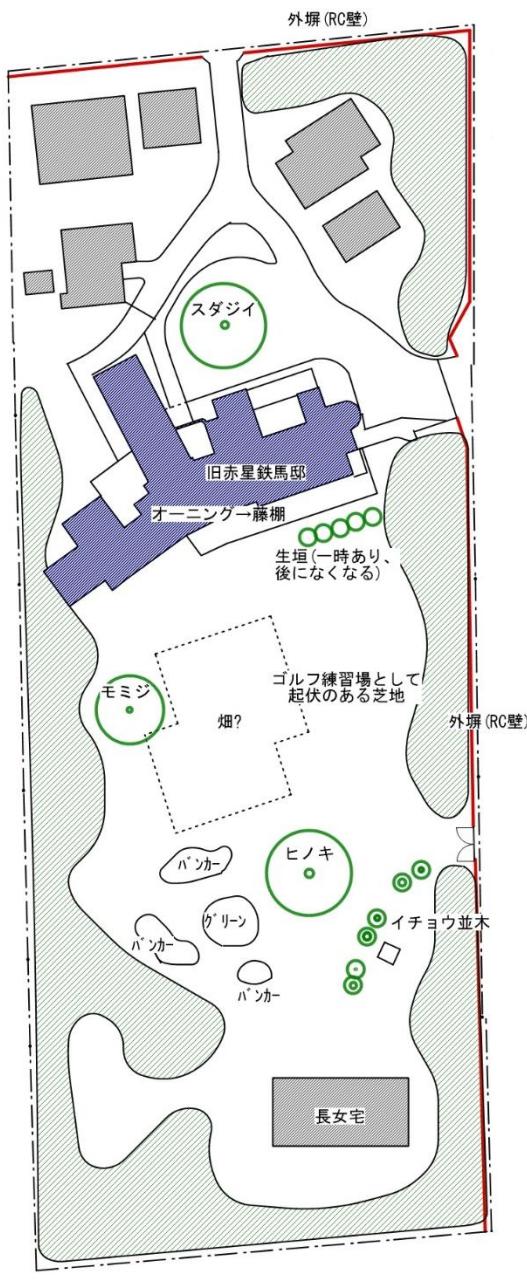
敷地内の様子 (設計図を基に作成)	主な資料
 <p>外堀 (RC壁)</p> <p>ガレージ 車庫</p> <p>物置</p> <p>犬小屋</p> <p>倉庫</p> <p>旧赤星鉄馬邸</p> <p>オーニング</p> <p>プール</p> <p>外堀 (RC壁)</p> <p>0 10 20m</p>	 <p>設計図より 配置図 (レーモンド建築設計事務所所蔵) 1935年('july13-35'の書き込みあり)</p>

図1-7 旧赤星鉄馬邸 土地の変遷

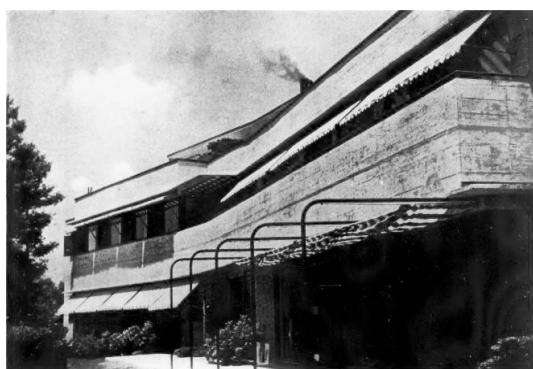
2. 竣工時～GHQ 接收以前  
昭和9(1934)～昭和20(1945)年頃

敷地内の様子  
(古写真、昭和20(1945)年8月3日撮影  
米軍空中写真を基に作成)

主な資料



オーニングが藤棚にかわる前の様子  
ペンシルベニア大学所蔵写真



オーニングが藤棚にかわる前の様子  
「THE ARCHITECTURAL RECORD」  
1936年1月号より

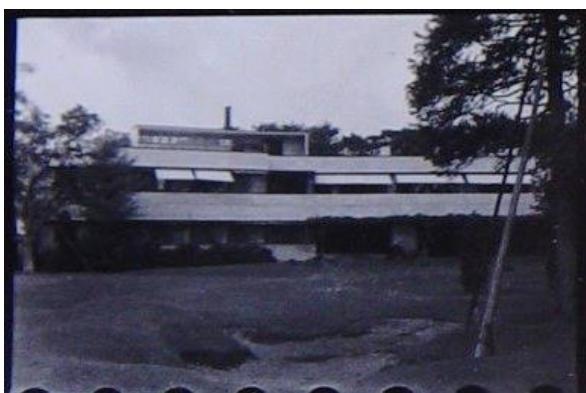


日本間前のオーニングが藤棚にかわった頃の様子  
「THE ARCHITECTURAL RECORD」  
1936年1月号より

図1-7 旧赤星鉄馬邸 土地の変遷(続き)

2. 竣工時～GHQ 接收以前  
昭和9(1934)～昭和20(1945)年頃(続き)

主な資料

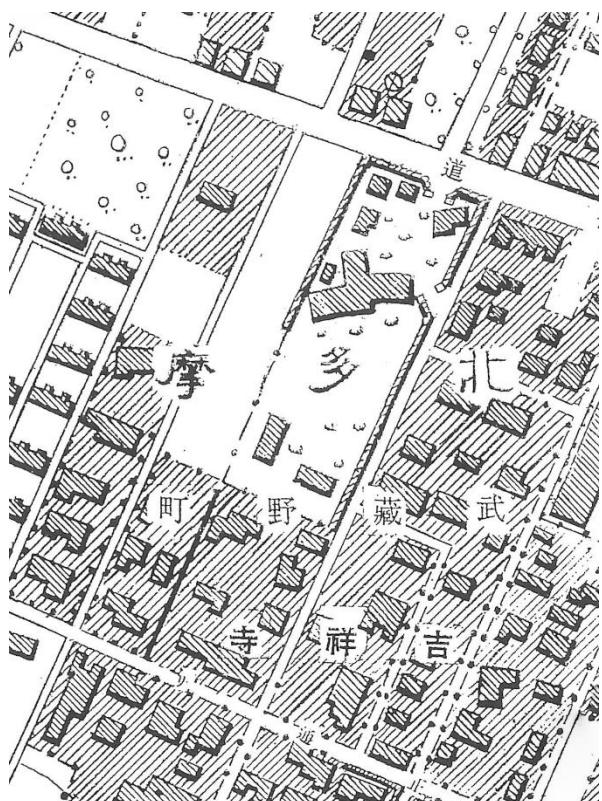


オーニングが藤棚にかわった後の様子  
ペンシルベニア大学所蔵写真

図1-7 旧赤星鉄馬邸 土地の変遷(続き)

2. 竣工時～GHQ 接收以前  
昭和9(1934)～昭和 20(1945)年頃(続き)

主な資料



国土地理院昭和 18(1943)年 12月  
空中写真測図 3千分の1地形図より  
旧赤星鉄馬邸周辺



国土地理院昭和 20(1945)年 8月 3日撮影  
米軍空中写真

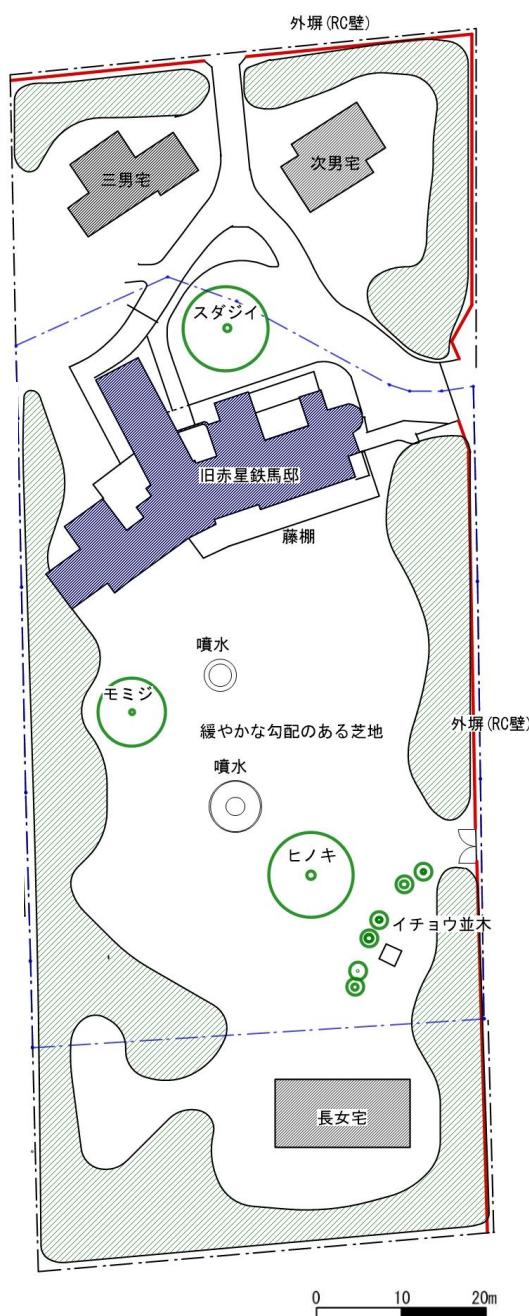
図 1-7 旧赤星鉄馬邸 土地の変遷(続き)

3. GHQ 接收期～修道女会取得前  
昭和 20(1945)～昭和 31(1956)年 8月頃

敷地内の様子

(「小木曾邸返還時建築図面」、「小木曾邸平面図 接収解除時」、昭和 23(1948)年、昭和 31(1956)年米軍撮影空中写真等を基に作成)

主な資料



国土地理院 1948(昭和 23)年 1月 8日撮影  
米軍空中写真

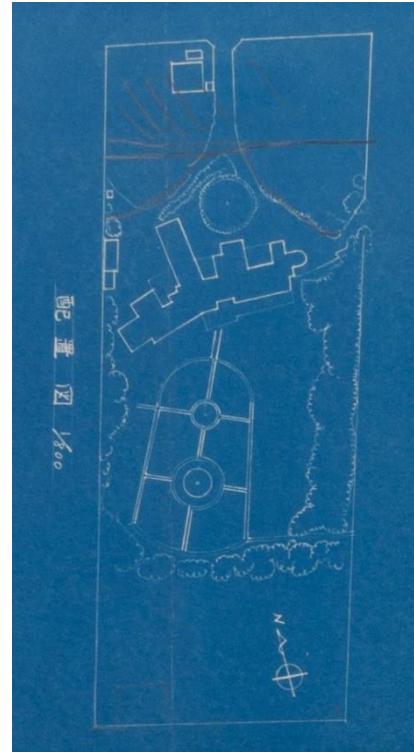
図 1-7 旧赤星鉄馬邸 土地の変遷(続き)

3. GHQ 接收期～修道女会取得前  
昭和 20(1945)～昭和 31(1956)年 8 月頃(続き)

主な資料



国土地理院 1956(昭和 31)年 4 月 13 日  
撮影米軍空中写真



「小木曾邸平面図 接收解除時」より配置図部分



裏面に修道女会による「購入した当時 1956 年 8 月」のメモがある写真  
(ノートルダム清心女子大学所蔵)  
※購入当時であれば直前の様子に近いと考えられるため、参考資料とした

図 1-7 旧赤星鉄馬邸 土地の変遷(続き)

4. 修道女会時代  
昭和 31(1956)～令和 2(2020) 年頃

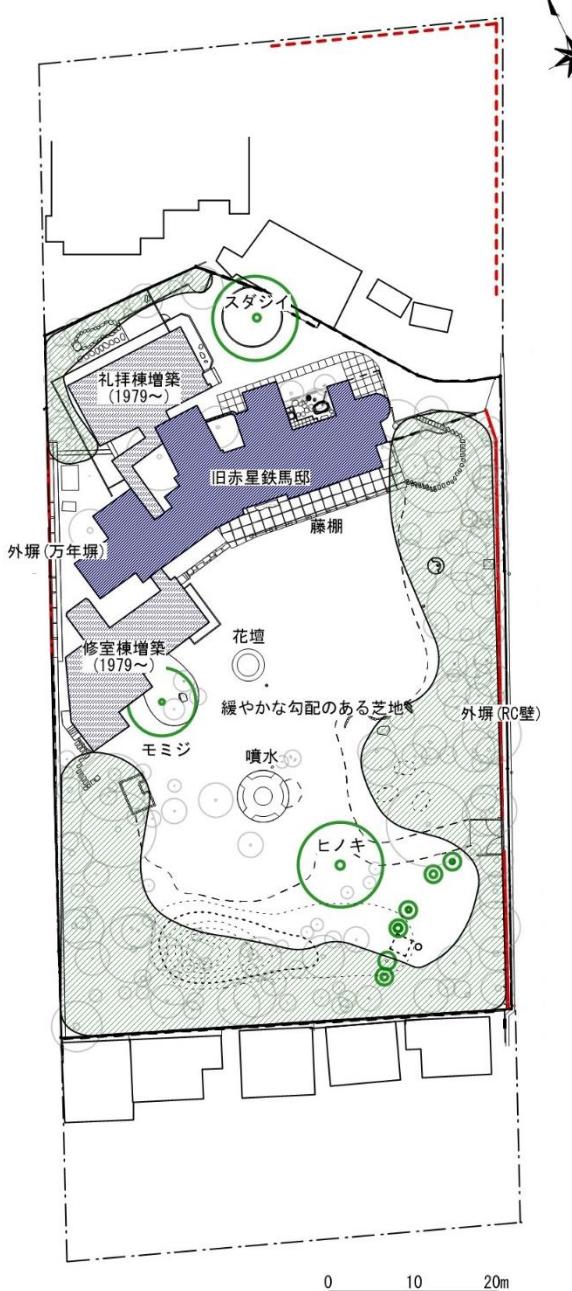
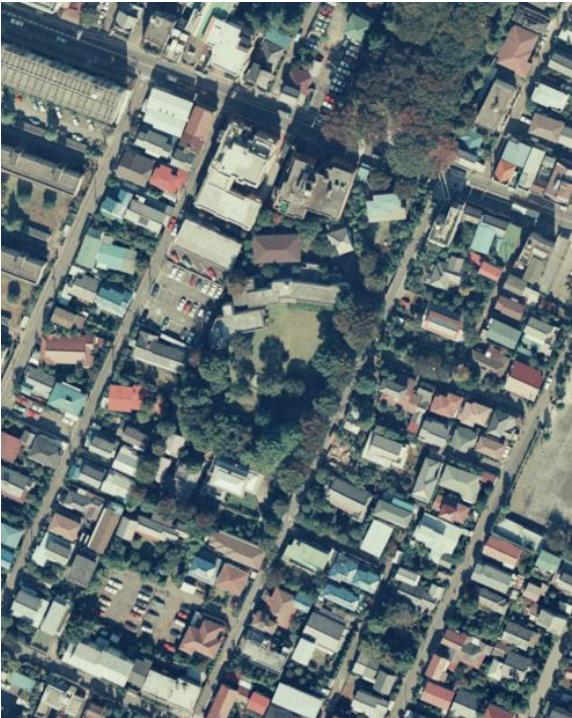
<p>敷地内の様子 (修道女会時代写真、昭和 59(1984)年・平成 21(2009)年撮影空中写真(いずれも国土地理院)、令和 6(2024)年度現況測量図を基に作成)</p>	<p>主な資料</p>
	 <p>国土地理院 1984(昭和 59)年 10月 31 日撮影空中写真</p>  <p>1971～72 年頃の庭の様子 (ノートルダム清心女子大学所蔵)</p>

図 1-7 旧赤星鉄馬邸 土地の変遷(続き)

## (5)赤星鉄馬について

### 1)概要

赤星鉄馬は明治 15(1882)年、東京府（現東京都）に生まれ、大正、昭和期に活躍した実業家である。父から受け継いだ財産があり、富豪として知られる人物であったが、その財産を自ら使うのみでなく、寄付や学術への支援も行っていた。

明治 34(1901)年から同 38(1905)年にかけて、父弥之助の病気・死去による一時帰国を挟んでアメリカに留学し、アメリカの文化を知るとともにスポーツに熱中するようになった。釣り、馬の飼育、ゴルフは、後年まで鉄馬の趣味となった。

関東大震災後、吉祥寺に移り住み、昭和 19(1944)年に疎開するまで在住していた。この間である昭和 3(1928)年には、武藏野村が町となり、新庁舎建設にあたって、鉄馬は多額の寄付を行った<sup>7</sup>。

### 2)富豪となった背景

鉄馬の父は、薩摩藩出身で明治期に海軍御用達の貿易商として財産を築いた赤星弥之助である。鉄馬は長男で、明治 37(1904)年に弥之助が亡くなると、その財産を引き継ぎ、富豪として知られるようになった。赤星弥之助は、同郷の茶人伊集院兼常の勧誘で明治 24 年頃から美術品蒐集を開始し、わずか 10 年余りの歳月で大鰐という異名を取るほどの勢いで墨蹟、古筆切、経文、消息、古文書、茶道具、蒔絵調度、陶磁器、屏風類に浮世絵など一流品ばかり膨大なコレクションをものにした。現在国宝に指定されている梁楷「雪景山水図」（東京国立博物館）や巨勢金岡「那智瀧図」（根津美術館）なども弥之助の旧蔵品である。鉄馬自身は「太刀 銘包永」（国宝 静嘉堂文庫美術館）等を有した愛刀家ではあったが、弥之助の 13 回忌が終わった後、国への寄贈や美術館の開設も検討し、母方の親族である樺山愛輔、茶人の団琢磨仲介を経て世話人に茶人の高橋義雄（籌庵）に、一流の茶道具商 13 人を札元に集め、大正 6(1916)年 6 月 9 日、東京両国の美術俱楽部で第 1 回の入札が行われ、300 点が売り立てられた。この入札で 1 万円以上の値がついた品が 92 点に上るなど記録破りの高値が続出し、売上高は 395 万円に上った。この好景気に籌庵は「道具の優等なるにも因るべけれども、又以て日本経済社会の膨張を觀るに足る」と記しているほどである。同年 10 月 6 日に第 2 回の売り立てが行われ 380 点が売られ、1 万円以上が 15 点、総額 89 万円を売り上げ、さらに同月 15 日に第 3 回売り立てが行われ、200 点が売られたが、1 万円以上は 1 点しかなく売上高 28 万となった。3 回の売り立て総額は 510 万円に上り、戦前の入札会の 2 位の座を占め、赤星家には、2 割の経費、手数料を引いて 410 万円近くが渡った<sup>8</sup>。なお、弟のうち四郎、六郎はゴルフの振興に名を馳せたことは有名だが、弥之助の古美術愛好の DNA を継いだのは五郎で、大正 4(1915)年から朝鮮京城で鉄馬が経営していた成歓牧場の代表社員であった頃、朝鮮古陶磁の研究者として知られた浅川伯教の手引きで朝鮮陶磁器蒐集に没頭、一大コレクションを形成

<sup>7</sup> 『武藏野市百年史』には「昭和三年度 決算書によると、寄付金は総額で二万九千二百九十七円五十銭であった。昭和四年二月の追加予算によると、赤星鉄馬ら、千二百人が拠金することになっているから、昭和三年度末の、町の世帯数を二千六百世帯程度であったと推定すると、ほぼ四六パーセント前後の世帯主が寄付に応じたことになる。個々の個人の寄付額を記した記録は、残されていないようである。」との記録が残っている。

<sup>8</sup> 高橋義雄 『近世道具移動史』（慶文堂書店、1929）208-227p

し、現在安宅英一の手を経て現在大阪市立東洋陶磁美術館の李朝陶磁コレクションの一角を彩っていることを付しておく<sup>9</sup>。

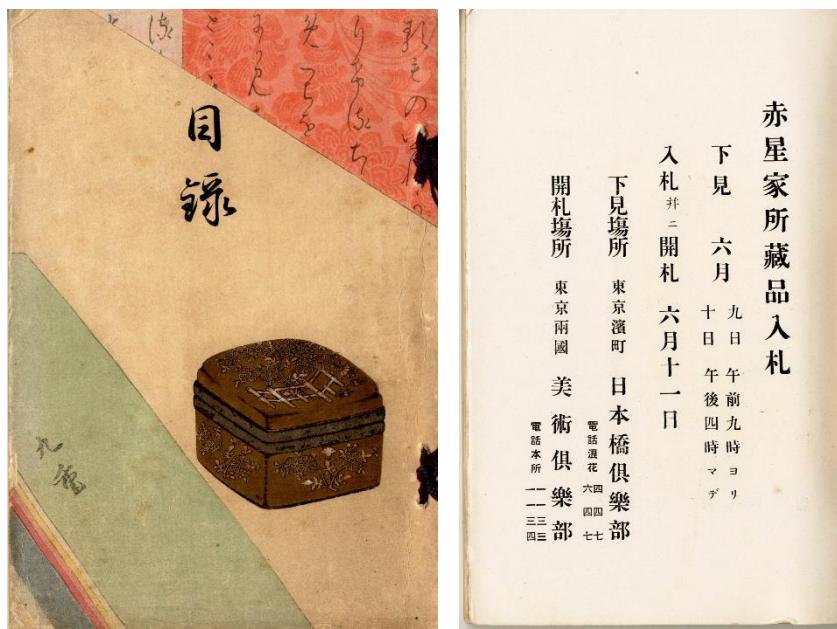


図1-8 「目録」(赤星家所蔵品入札)より 表紙・概要

(島根大学附属図書館デジタルアーカイブ)

### 3) 学術への支援(啓明会の設立)

鉄馬は、大正7(1918)年8月8日、売上の内100万円を投じて文部省管轄の財團啓明会を設立した。自身は啓明会の運営には一切関わらず、親族にも関わらせず、創立者を牧野伸顕、初代理事長平山成信に任せたのである。これまで啓明会が助成した研究助成件数は、280件に上っており、わが国の諸科学の発展に多大なる貢献をしてきた。その内容を見ると、対象分野は自然系から人文系、社会系分野まで非常に幅広く採択していることがわかる。具体的には、大正13(1924)年4月に伊東忠太と共同研究の名義で啓明会の助成を受けた鎌倉芳太郎は、琉球芸術調査事業に着手し、東京美術学校助手(美術史研究室勤務)として調査記録をまとめ、沖縄の芸術文化に多大なる貢献を果たした<sup>10</sup>。また、染織家としては沖縄伝統の染織技法である紅型の技術を継承し、重要無形文化財「型絵染」の人間国宝に認定されている。他に金田一京助の「アイヌ伝説研究の整理」、柳田国男の「日本民族語彙の編集・刊行」、長岡半太郎の「伊能忠敬著 測量日記の出版」をはじめ、化学の分野においても、柴田桂太・柴田雄次「植物色素の生物化学的及分光化学的研究」、真島利行「鳥頭属植物中のアルカロイドの研究」、「本邦における化学的研究業績総覧の編纂」及び「アコニチン類の化学的構造に関する研究」、小竹無二雄「ひきがえる毒の化学的研究」、朝比奈貞一「有機分子化合物の研究」、緒方知三郎「糖尿病の実験的研究」などが助成を受けている<sup>11</sup>。会の運営は平成22(2010)年まで続いた。

<sup>9</sup> 与那原恵『赤星鉄馬 消えた富豪』(中央公論新社、2019) 288-294p

<sup>10</sup> 三木健「鎌倉芳太郎 沖縄文化研究にささげた半世紀」『南島史学会』2号(1973)

<sup>11</sup> 池上四郎「日本で最初の財團法人「啓明会」—その設立と推移」MEDCHEM NEWS6卷4号(1996)

#### 4)居住地の変遷・邸宅の建築

アメリカ留学からの帰国後、ジョサイア・コンドルの設計で、明治40(1907)年に神奈川県大磯に別荘を、明治45(1912)年に港区赤坂台町（現港区赤坂）に邸宅を建てた。

大正12(1923)年の関東大震災により、父弥之助の代からあり、赤星家本邸として使われていた麻布区鳥居坂（現港区六本木）の邸宅が半壊した後、鉄馬一家は以前よりカントリーハウスを所有していた武蔵野町に移り住み、昭和9(1934)年にはレーモンド設計による邸宅（現在の旧赤星鉄馬邸）が竣工した。鉄馬は、五日市街道の向かいに立地する成蹊学園の初代理事長であった岩崎小弥太や成蹊学園の発展を支えた今村繁三と親交があった<sup>12</sup>。赤星鉄馬の孫へのヒアリングによれば、成蹊学園に子どもたちを通わせるのがこの地を選んだ理由の一つと考えられる。鉄馬とレーモンドはともに東京俱楽部、東京ゴルフ俱楽部の会員で、レーモンドは東京ゴルフ俱楽部が駒沢から朝霞に移転した際、新しいクラブハウスを設計した（昭和7(1932)年竣工）。また、鉄馬邸に先立って弟たちの邸宅を設計している<sup>13</sup>。これらのことから、両者に交流あったことが伺えるが、その詳細や鉄馬がレーモンドに設計を依頼した経緯は判明していない。

鉄馬は昭和19(1944)年に大磯へ疎開するまでここに居住したが、その後は戻ることはなく、昭和26(1951)年に逝去した。

#### 5)趣味・家族・人柄

鉄馬の主な趣味は前述のゴルフのほかに乗馬、釣り、バラの栽培で、釣りに関しては、環境の変化や乱獲に耐え、釣り人にとっても楽しめる魚を日本に導入したいという思いから、大正14(1925)年に、日本政府協力のもと日本ではじめて北米からブラックバスを輸入し、芦ノ湖に放流したことでも知られている<sup>14</sup>。

鉄馬の人柄について、小学校入学の前年から6年生の秋まで鉄馬と生活を共にしたという孫の赤星静雄は、マナーに厳しい反面、書道や数字の書き方を教えてくれた「優しき良き祖父」であり、「自然をこよなく愛し、自然と調和して生きた人であったと思います。」と述べている<sup>15</sup>。

また、鉄馬の兄弟姉妹には、前述の五郎のほか、喜介、四郎、六郎などがいる。四郎、六郎はゴルファーであり、鉄馬と同じ東京ゴルフ俱楽部に所属していた。ゴルフ界で著名になるのは弟たちの方だが、鉄馬は先に東京ゴルフ俱楽部の会員となっており、

<sup>12</sup> 今村繁三は、赤星鉄馬と同様、東京俱楽部の会員だった。また、安藤せん子『紅燈情話 二代芸者』（新栄社出版部、大正2年）には赤星鉄馬と今村繁三、田中銀之助が連れ立って歓楽街に出かけていた様子が書かれている。

<sup>13</sup> 赤星四郎別邸（昭和6(1931)年竣工）、赤星喜介邸（昭和7(1932)年竣工）

<sup>14</sup> ブラックバスを輸入した目的について、鉄馬は、外来生物をもたらすことのリスクも踏まえつつ、「食べて旨い、釣って面白い魚を多くのアングラーと共に長く楽しみたいことにあるのだが、同時にこれが水産方面はもとより、副業的に見ても必ず利益をもたらし、やがてそれが多少とも国家に貢献するという信念と自負があればこそ」と述べている（赤星鉄馬・福原穀『イーハトーヴ出版の釣り文藝シリーズ1 ブラックバス』（イーハトーヴ出版株式会社、1996））。

<sup>15</sup> 赤星静雄「祖父赤星鉄馬の思い出」（松井廣吉・所沢一夫編集『ブラック・バス』（芦ノ湖漁業協同組合、1970）96-97p）

同倶楽部に残る最も古いものである大正5(1916)年の会員名簿に鉄馬の名が掲載されている<sup>16</sup>。

また、鉄馬の妻である文(文子)もゴルフを楽しんだとされる<sup>17</sup>。東京ゴルフ倶楽部によれば、同倶楽部に残る最も古いものである大正5(1916)年の会員名簿に鉄馬の名前が掲載されている<sup>18</sup>。

このように、鉄馬は父赤星弥之助から受け継いだ有り余る財産で釣りやゴルフ、馬好きがこうじた牧場経営、花柳界でも粋人として華やかな人生を歩む一方、自らが表に出ることなく終戦間際まで学術研究に莫大な私財を投じ、わが国の学術振興の礎を築いたのである。

---

<sup>16</sup> 75年史編纂委員会編『東京ゴルフ倶楽部75年史』(東京ゴルフ倶楽部、1989) 31-32p

<sup>17</sup> 東京倶楽部によって大正15年に開催された「第1回京婦人対関西婦人対抗ゴルフ協議」の出場者には赤星文子の名がある。また、「昭和4年の婦人ハンディキャップ一覧」では、ハンディキャップは「9」と、22人中4番目だった。(75年史編纂委員会編『東京ゴルフ倶楽部75年史』(東京ゴルフ倶楽部、1989) 68-69p)

<sup>18</sup> 75年史編纂委員会編『東京ゴルフ倶楽部75年史』(東京ゴルフ倶楽部、1989) 31-32p

## 【赤星鉄馬略年譜】

年代		主なできごと
和暦	西暦	
明治 15	1882	赤星弥之助の息子（六男七女の長男）として生まれる。
明治 34	1901	アメリカ留学のため旅立つ、ローレンスビル・スクールに入学
明治 37	1904	父弥之助の葬儀のためアメリカから一時帰国
明治 38	1905	アメリカへ戻り、ローレンスビル・スクールを卒業、日本に帰国
明治 40	1907	大磯の土地に赤星家別荘（洋館）を建てる（ジョサイア・コンドル設計）
明治 45	1912	赤坂台町（現港区赤坂）に邸宅が完成（ジョサイア・コンドル設計）
大正 3	1914	東京俱楽部会員を母体に「東京ゴルフ俱楽部」設立。会員に赤星兄弟や今村繁三など
大正 5	1916	雑誌『実業之日本』(大正五年八月十五日号)掲載の「華族・富豪宅地番付」で15位（三千八百坪）に位置する
大正 6	1917	赤星家所蔵品入札として弥之助コレクションを売立に出す
大正 7	1918	日本初の本格的学術財団「啓明会」設立
大正 12	1923	【関東大震災】 ・鳥居坂の邸宅（本邸）、大磯の洋館、赤坂台町の邸宅が半壊
大正 13	1924	【成蹊学園が池袋から吉祥寺に移転】 ・現・旧赤星鉄馬邸の土地を購入 ・吉祥寺に転居、本家とする
大正 14	1925	日本政府協力のもと、ブラックバスを輸入する
昭和 3	1928	【武藏野村が武藏野町へ（町制施行）】 武藏野村が町となった際の新庁舎建設にあたり、多額の寄附を行う
昭和 9	1934	吉祥寺の赤星鉄馬邸をレーモンド設計で建替える（現・旧赤星鉄馬邸）
昭和 19	1944	旧赤星鉄馬邸が日本陸軍に接収される（推定） 神奈川県大磯に疎開
昭和 20	1945	旧赤星鉄馬邸が進駐軍に接収される
昭和 26	1951	大磯にて逝去

## (6)アントニン・レーモンドについて

### 1)生涯

アントニン・レーモンドは、第二次世界大戦前・後に日本に設計事務所を構え、国内の多くの著名な建築を残すとともに多くの建築家を育て、日本の近代建築の発展に大きく貢献した建築家である。日本のほかに、アメリカやインドでも設計を行っている。

また、日本の伝統的な美意識や建築の考え方を取り入れた自身の建築論と建築作品を、アメリカ建築家協会が発行する雑誌「Architectural Record」へ発表し、詳細図集を発行して世界に発表しており<sup>19</sup>、日本のみならず、世界の近代建築にとっても重要な位置を占めている。

レーモンドは、1888年、オーストリア帝国の統治下にあったチェコに生まれ、1910年にプラハ工科大学を卒業した。1911年にアメリカへ渡り、キャス・ギルバート事務所で働く。

1914年には、長く生活を共にし、レーモンドの建築においてもインテリア・家具・テキスタイル等を担うことになるノエミと出会い、結婚した。当時、レーモンドは建築事務所の「死に絶えたような単調さと焦燥感」に耐えられず、プロとして絵を描くことを決意してアトリエを構えたとしている。結婚後はノエミと製図机を向き合わせて仕事をすることとなった<sup>20</sup>。

1916年には、ノエミの親友が当時すでに著名な建築家であったフランク・ロイド・ライトのパートナー、ミリアム・ノエルと知り合ったことをきっかけに、ライトの下で働くことになった。従軍のため一時設計の仕事を離れた後、大正8(1919)年12月に帝国ホテルの建設のためフランク・ロイド・ライトと共に来日したが、その後独立して大正10(1921)年に丸の内に設計事務所を設立し、本格的に日本での設計活動を開始した。

第二次世界大戦中は日本を離れ、軍事施設の設計やインド、東南アジア等での設計活動を行った。日本建築を知る建築家として軍への協力も行ったが、このことについて、自伝では、日本への愛情を述べ、「日本を負かす意味を持つ道具をつくることは、容易な課題ではなかった」と述べている<sup>21</sup>。また、戦時中は日本に住んだことのあるアメリカ人のグループに加わり、無差別爆撃の禁止等を訴える活動を試みていたという<sup>22</sup>。

終戦後に再び来日し、設計事務所を再開した。戦前・戦後ともレーモンド設計事務所はレーモンドを長とする組織的な建築事務所として運営され、前川國男、吉村順三、ジョージ・ナカシマ、杉山雅則など日本を代表する建築家を輩出し、日本の建築界に多大な影響を与えた。

昭和48(1973)年にアメリカへ帰国し、昭和51(1976)年10月にペンシルベニア州ニュー Hopkins にある自分が設計したスタジオにて88年の生涯を閉じた。

<sup>19</sup> 「THE Architectural Record」1936年1月号、詳細図集には旧赤星鉄馬邸も掲載されている。

<sup>20</sup> アントニン・レーモンド著・三沢浩訳『自伝 アントニン・レーモンド（新装版）』（鹿島出版会、2007）、32-33p

<sup>21</sup> アントニン・レーモンド著・三沢浩訳『自伝 アントニン・レーモンド（新装版）』（鹿島出版会、2007）、175p

<sup>22</sup> アントニン・レーモンド著・三沢浩訳『自伝 アントニン・レーモンド（新装版）』（鹿島出版会、2007）、174p

## 2)レーモンドの建築スタイル

### ①自身のスタイルの確立

レーモンドは1921年に独立したが、自伝で、独立後初期の建築には、師であるライトの影響がみられると述べている。

最初に独自の建築スタイルを実現した作品として自伝で挙げているのは「靈南坂の自邸」(1926年竣工)であり、「現代建築の真のはしり」、「打放しコンクリートの耐震構造で、セメント・モルタルはおろか、何の仕上げもなかった。多分その点ではどこよりも早かったと思う。」としている。また、日本の伝統的建築や、当時取り入れられるようになつた和洋折衷の生活様式を研究し、浜尾子爵夫人別邸(1927年竣工)について、「初めて和洋の生活様式を調和させる解決策を発見し、その上に斬新で自然な形を与えた。このデザインは平面でもディテールにおいても、今日、現代的と考える住居の先駆であった。」としている<sup>23</sup>。

浜尾子爵夫人別邸以降も、レーモンドは日本の伝統的建築や和洋折衷の生活様式を研究しながら住宅の設計に取り組んでおり、後述するように、自伝で戦前の作品を取り上げる中で、「四つの住宅」と題して赤星鉄馬邸および同時期の住宅の設計について述べている。

レーモンドが日本建築の研究を通じて自らのスタイルを確立していく過程について、レーモンド事務所の所員であった三沢浩は、「戦前にあっては彼の建築スタイルは、なかなか安定しなかつた。彼は「帝国ホテル」によりF.L.ライトの強い影響を受け、それから逃れようと、チェコ・キュビズムやデ・スタイル様式をとり入れた。さらに歴史的様式の取り入れの上に、オーギュスト・ペレ、ル・コルビュジエの模倣や剽窃が取り沙汰されたから、日本の評論家はレーモンドの節度を疑った。しかし、その批判の中でモダニズム建築の原理を、日本の伝統的建築の中に見つけ、自分の設計作法にとり入れていた。」と述べている<sup>24</sup>。

### ②レーモンドの5原則

レーモンドは、戦後、5原則(「直截性」、「単純性」、「経済性」、「自然主義」、「民主的な建築」)<sup>25</sup>と呼ばれる考え方を示した。

<sup>23</sup> アントニン・レーモンド著・三沢浩訳『自伝 アントニン・レーモンド(新装版)』(鹿島出版会, 2007), 107p

<sup>24</sup> 三沢浩「A・レーモンドのモダニズム: その設計作法」(神奈川県立近代県立美術館 太田泰人、三本松倫代編集『建築と暮らしの手作りモダン アントニン&ノエミ・レーモンド』(Echelle-1/美術館連絡協議会, 2007)

<sup>25</sup> 「日本近代建築の父 アントニン・レーモンドを知っていますか」プロジェクト委員会編『教文館創業130年記念 日本近代建築の父 アントニン・レーモンドを知っていますか 銀座の街並み・祈り』(教文館, 2016)

5原則は、論説としてまとめられてはいない<sup>26</sup>が、レーモンド自身が設計において実践してきたもので、前述のように著名な建築家を輩出してきたレーモンド事務所にも深く浸透している<sup>27</sup>。

以下に、レーモンド事務所に継承される5原則を記載する。

#### 【レーモンドの5原則】

- |        |  |
|--------|--|
| 直截性    | …クライアント（建主）からの抽象的な要求を目的空間として構成し、機能を最重要視すること                            |
| 単純性    | …虚飾を排し、無駄、無意味な空間を造らず、これ以上削ぐものがない状態まで簡素に徹すること                           |
| 経済性    | …費用を無駄なく有効に使いながら、ぜい肉をつけない端正な仕上がりを心がけ、完成後の維持・管理費等のライフサイクルコストに十分分配慮する必要性 |
| 自然主義   | …資材は出来る限り自然の素材を使い、既存の樹木や敷地形状などの周囲の環境を保持するためにも、自然を損なわずに活用する姿勢           |
| 民主的な建築 | …建築は個性的。人間的でなければならないという根本的原則   |

「日本近代建築の父 アントニン・レーモンドを知っていますか」プロジェクト委員会編『教文館創業130年記念 日本近代建築の父 アントニン・レーモンドを知っていますか 銀座の街並み・祈り』（教文館、2016）より抜粋

#### 3)「アントニン・レーモンド自伝」における旧赤星鉄馬邸の記述

自伝において、旧赤星鉄馬邸は、戦前のことと述べた第3章で、「四つの住宅<sup>28</sup>」の一つとして写真付きで取り上げられている。以下に記述を抜粋する<sup>29</sup>。

この三つ<sup>30</sup>の場合、デザインの問題点はいずれも本人の二重生活に必要な、入念な配置計画を作り上げることであった。客と、家族と、使用人のための分かれた玄関。その家に親しくない人を入れるための、異なった種類の応接間。管理のために（ママ）場所や、その事務室など。和洋両設備の厨房。伝統的日本間と同様に、畳のある様式の部屋など。

<sup>26</sup> 『私と日本建築』81-82pで、レーモンドは現代建築を公式のような形で示すことはできず、実践しなければその思想は分からないとした。

<sup>27</sup> 三沢浩「A・レーモンドのモダニズム：その設計作法」（神奈川県立近代県立美術館 太田泰人、三本松倫代編集『建築と暮らしの手作りモダン アントニン&ノエミ・レーモンド』（Echelle-1/美術館連絡協議会、2007）、「日本近代建築の父 アントニン・レーモンドを知っていますか」プロジェクト委員会編『教文館創業130年記念 日本近代建築の父 アントニン・レーモンドを知っていますか 銀座の街並み・祈り』（教文館、2016）

<sup>28</sup> 赤星喜介邸、赤星鉄馬邸、川崎守之助邸、福井菊三郎邸

<sup>29</sup> アントニン・レーモンド著・三沢浩訳『自伝 アントニン・レーモンド（新装版）』（鹿島出版会、2007）、122-126p

<sup>30</sup> 赤星鉄馬邸、川崎守之助邸、福井菊三郎邸

その他面白い点は、泥棒除けのことであった。すべての外部の窓には、雨戸か格子をつけること。<sup>すべり</sup>辺りまたは折りたたみ。現代的な広い開口部では難しい問題であった。内庭は外から入れなかつたからその点は助かり、そこには雨戸が不要で、開口部は夜間の換気用にもなつた。

どの住宅も鉄筋コンクリート造で打放し、耐震耐火。空気調和設備は当時はなかった。湿けっぽい雨季や、熱帯性の暑い夏の、壁の結露を除くため、全建物は壁を二重にした。どの部屋も南を解放し、最大の窓口をとり、換気をはかった。南と西の窓口には庇をつけて、夏の太陽から守つたが、低い冬の太陽をとりいれるように計算した。二重生活の組み合わせは造園にも及んだ。造園には西洋式の部分と、純粹な日本式の部分とがあつた。

三つの住宅のためにノエミと私は、庭園も家具も、じゅうたんも、テキスタイルも、電気器具もデザインした。簡単にいえば、仕事に付随するもの全部であつた。だから三つとも今までどこでも成功したことのない、ごく稀な等質性と、統一性が与えられたのである。

#### 4)旧赤星鉄馬邸および庭にみられるレーモンドの設計思想

旧赤星鉄馬邸は、レーモンドがライトの弟子としての作品とは別の、独自のスタイルを持つようになった後の作品である。自伝において「彼らの要求を除き、まったくの自由が与えられた。」とされており、施主からの条件にそれほど縛られず、レーモンド自身の建築の考え方をよく反映していることがうかがえる<sup>31</sup>。戦後の5原則にもつながるモダニズム建築の考え方方が表れはじめた初期のものといえ<sup>32</sup>、また、日本の建築や日本人の生活の研究の成果が建物や庭に反映されている。

主な特徴は以下の通りである。

- ①施主の西洋式・日本式双方の様式を取り入れた生活に合わせた設計
- ②鉄筋コンクリート造打ち放しの実践
- ③外部空間（庭）と家との関係を重視した設計
- ④建物だけでなく住居に関するものすべてのデザイン

- ①施主の西洋式・日本式双方の様式を取り入れた生活に合わせた設計

レーモンドが初めて和洋双方の生活様式を取り入れることに成功したのは、前述の通り浜尾子爵夫人別邸だが、これ以降に和洋の生活様式を取り入れた作品として大きく取り上げられているのが、川崎守之助邸、赤星鉄馬邸、福井菊三郎別邸の3つである。4つの住宅の中で、現存するのは赤星鉄馬邸のみである。

<sup>31</sup> アントニン・レーモンド著・三沢浩訳『自伝 アントニン・レーモンド（新装版）』（鹿島出版会、2007）、122p。施主からの要求は具体的には書かれていない。

<sup>32</sup> 5原則との詳細については本節第10項「3) 文化財（建造物）としての価値」を参照。

## ②鉄筋コンクリート造打ち放しの実践

レーモンドは1926年竣工の「靈南坂の自邸」において初めてコンクリート打ち放しを設計に取り入れており、世界的にみても先駆的な例といえる。打放しコンクリートの最初期の建築としては、オーギュスト・ペレの「ル・ランシーの教会」(1923年竣工)があるが、打放しコンクリートは柱・梁に用いられており、壁として初めて用いたのはレーモンドの「靈南坂の自邸」とされる。

戦前のレーモンドの打放しコンクリートによる大規模住宅として、靈南坂の自邸、旧赤星鉄馬邸のほかに赤星喜介邸(1932年竣工)、川崎守之助邸(1934年竣工)、福井菊三郎邸(1936年竣工)があったが、現存しない。1934年竣工の旧赤星鉄馬邸は、レーモンド作品のうち、打ち放しコンクリートを用いた大規模建築の住宅で現存するものとしては最も古い。

## ③外部空間（庭）と家との関係を重視した設計

旧赤星鉄馬邸では、南側の庭と室内の連続性に配慮した設計がなされている。例えば、居間・食堂では柱を開口部より内側に入れる芯外しを用い、大きな開口をとっている。また、日本間の南側の窓は、全面開口となるよう、工夫を凝らしたスチールサッシを使用している。

また、南側の広がりのある空間は華美な庭園とはしない一方、日本間の前や北側の中庭には、窓から眺められるよう、シンプルな植栽を配置していることが設計図（配置図）から読み取れる。

## ④建物だけでなく住居に関するものすべてのデザイン

アントニン・レーモンドは、ノエミとともに旧赤星鉄馬邸に関する全部をデザインしたとしている。トータルデザインの様子は、設計図や竣工直後の写真などから読み取ることができる。配置図には中庭、テラス、門の付近、外構周辺の植栽が描き込まれており、照明や暖炉のファイヤードッグ、特徴的なデザインであった門の詳細図もある。また、竣工直後の写真には、テーブル、椅子、ソファー、絨毯、間仕切りなどが写っている。設計図・写真の双方にみられる造り付け家具は、現在も残されている。

なお、具体的にどの部分がアントニン、ノエミどちらのデザインであったかは、ノエミのクレジットが設計図面に記されていないため、一部を除いて推定するほかない。まず、当初の門（現存せず）がノエミのデザインであることは、設計担当者の一人である杉山雅則が雑誌のインタビューで語っている<sup>33</sup>。また、次節で詳述する通り、仕事全般において、内装はノエミが担ったというレーモンドや所員の発言<sup>34</sup>があることを踏まえると、現存する造り付け家具のほか、前述の古家具、絨毯や間仕切り

<sup>33</sup> 「昭和初期モダニスト回顧録 レーモンド事務所の思い出 杉山雅則氏に聞く」(『SD 第286号』(鹿島出版会、1988))

<sup>34</sup> 「昭和初期モダニスト回顧録 レーモンド事務所の思い出 杉山雅則氏に聞く」(『SD 第286号』(鹿島出版会、1988))

等のテキスタイル、室外のオーニング、ファイヤードッグ等もノエミのデザインと考えられる<sup>35</sup>。後年のノエミの作品<sup>36</sup>と比べても、違和感がない。

### 【アントニン・レーモンド略年譜】

レーモンドは多くの作品を発表しているため、主要作品は、建築史上の評価、旧赤星鉄馬邸との関連、旧赤星鉄馬邸の今後の活用の参考となる現存例を挙げることとし、以下のものを中心に選定した。

- ・レーモンドが自伝において「四つの住宅」として旧赤星鉄馬邸とともにとりあげた、戦前の重要な住宅
- ・「日本近代建築の父 アントニン・レーモンドを知っていますか」プロジェクト委員会編『教文館創業 130 年記念 日本近代建築の父 アントニン・レーモンドを知っていますか 銀座の街並み・祈り』(教文館、2016) 4 頁において代表的な作品として挙げられたもの
- ・鉄筋コンクリート造の主なもの
- ・日本に現存（移築、復原含む）するもの

<sup>35</sup> 資料編に写真掲載、項目、ページ番号を注に記載予定

<sup>36</sup> 鈴木敏彦、飯田昂平、北澤興一、杉原有紀、齋藤さだむ「アントニン&ノエミ・レーモンドのトータルデザイン——ノエミ・レーモンドの果たした役割を中心に—」(住総研 研究論文集 No.43, 2016 年版) に「北澤コレクション」としてまとめられている。

年代		略歴および主要作品 (○は主要作品)	日本のモダニズム建築史・ コンクリート関連史 (○は建築作品、 括弧内は設計者)	欧米のモダニズム建築史 (○は建築作品、 括弧内は設計者)
和暦	西暦			
	1861			モ里斯・マーシャル・ フォークナー商会（モ リスによる「トータル デザイン」の提唱、ア ーツ・アンド・クラフ ツの動き）
明治 5	1872		銀座煉瓦街建設開始 ○第一国立銀行（清水喜 助）	
明治 10	1877		ジョサイア・コンドル来 日	
明治 21	1888	オーストリア領ボヘ ミア地方（現在のチ ェコ）クラドノで生 まれる		
明治 22	1889		(明治 20 年代) 日本に 鉄筋コンクリート構造が 伝わる	
明治 24	1891		○ニコライ堂（ジョサイ ア・コンドル） ○日本水準原点標庫（左 立七次郎）	
明治 27	1894		○三菱一号館（ジョサイ ア・コンドル）	
明治 29	1896		○岩崎久弥邸（ジョサイ ア・コンドル） ○日本銀行本店（辰野金 吾）	
明治 36	1903		琵琶湖疏水日ノ岡隧道東 口橋（7月竣工）をはじめとし、鉄筋コンクリー ト造の橋梁・構造物がつくられるようになる	
明治 37	1904		○横浜正金銀行（妻木頼 黄）	
明治 38	1905		佐世保市の軍事施設に鉄 筋コンクリート造の倉庫 が建設される  横浜銀行集会所（煉瓦 造）の階段踊場スラブに 鉄筋コンクリートが取り 入れられる。その後、部 分的（レンガ造と併用 等）に鉄筋コンクリート 造とする建築が建て始め られる	

明治 39	1906		○日本郵船小樽支店（左立七次郎）	
明治 40	1907			○ロビー邸（フランク・ロイド・ライト）
明治 42	1909		○赤坂離宮（片山東熊）	
明治 43	1910	プラハ工科大学卒業 渡米 キャス・ギルバートの設計事務所に入所する		○カサ・ミラ（アントニ・ガウディ）
明治 44	1911		日本初の全鉄筋コンクリート造のオフィスビル・三井物産横浜ビル（現KN日本大通りビル）が竣工する。  ○三井物産横浜支店（遠藤於菟・酒井祐之介） RC	○シュタイナー邸（アドルフ・ロース）
大正 2	1913		○諸戸清六邸（ジョサイア・コンドル）	
大正 3	1914	ノエミと出会い、結婚する	○東京駅（辰野金吾）	
大正 4	1915		○島津家袖ヶ崎邸（ジョサイア・コンドル）	
大正 5	1916	アメリカの市民権を取得 フランク・ロイド・ライトのもとで働き始める		
大正 6	1917			
大正 7	1918	○ドゥ・ヴィユー・コロンビエ座改築		デ・スタイル設立
大正 8	1919	ライトに誘われ、帝國ホテル建設のために来日		バウハウス開校
大正 9	1920		分離派建築会結成	
大正 10	1921	ライトの下から独立し、スラックと米国建築合資会社「American & Architectural & Engineering Co.Ltd.」を始める。中山隅三、女良己之助、小茂田半次郎、杉山雅則ら参加		

		○東京女子大学総合計画		
大正 11	1922	「東京俱楽部」「東京テニス俱楽部」の会員になる  ○聖路加国際病院計画（1928年まで計画、工事途中の1930年まで関わるが、発注者との意見の相違から手を引くこととなり、計画通りには実現しなかった）		
大正 12	1923	「レーモンド建築事務所 Antonin Raymond Architect」を名乗る	関東大震災を契機に、耐震性の高い建物として、レンガ造から鉄筋コンクリート造・鉄骨造への世代交代が進む  仕上げ表現としての全面打ち放しコンクリートが用いられ始める	○帝国ホテル（フランク・ロイド・ライト） RC（一部煉瓦造）
大正 13	1924	○後藤新平子爵邸（滅失） RC 住宅 ○アンドリュース＆ジョージ商会（滅失） RC ○星製薬商業学校記念講堂（現星薬科大学本館）（現存） RC（一部鉄骨造） ○東京聖心学院（修道院滅失、教室現存） RC		
大正 14	1925	サイクスとともにレーモンド&サイクス建築事務所を設立  ○A.P.テーテンス邸（2階木造）（滅失） RC 住宅 ○シーバー・ヘグナ一生糸倉庫（滅失） RC	○東京中央電信局（山田守） RC	
昭和元	1926	○靈南坂の自邸（滅失） RC 住宅	○同潤会アパート RC	○バウハウス=デッサウ校舎（ヴァルター・グロピウス）

				○自由学園明日館（フランク・ロイド・ライト）
昭和 2	1927	<p>パートナーであったサイクスが去り、社名をアントニン・レーモンド建築事務所とする</p> <p>○エリスマン邸（移築復原） 住宅</p> <p>○浜尾子爵夫人別邸（滅失） 住宅</p>		
昭和 3	1928	<p>○イタリア大使館日光別荘（現存） 住宅</p> <p>○スタンダード石油会社ビル（滅失） RC</p> <p>○スタンダード石油会社社宅群（滅失） RC 住宅</p>		
昭和 4	1929	<p>○岡山清心高等学校（現ノートルダム清心女子大学）（現存） RC</p> <p>○ソヴィエト大使館（滅失） RC</p> <p>○ライジングサン石油会社社宅群（滅失・一部現存） RC</p>		<p>○バルセロナ・パヴィリオン（ミース・ファン・デル・ロー工）</p>
昭和 5	1930	前川國男が所員となる	<p>○甲子園ホテル（遠藤新） RC</p>	<p>○トゥーゲントハット邸（ミース・ファン・デル・ロー工）</p>
昭和 6	1931	吉村順三が所員となる		<p>ニューヨーク近代美術館でインターナショナル・スタイル展開催</p> <p>○サヴォア邸（ル・コルビュジエ） RC</p>
昭和 7	1932	<p>○東京ゴルフ俱楽部クラブハウス（滅失） RC</p> <p>○赤星喜介邸（滅失） RC</p>		

昭和 8	1933	<ul style="list-style-type: none"> <li>○藤沢ゴルフクラブ（現存） RC</li> <li>○夏の家（移築現存） 住宅</li> <li>○教文館・聖書館ビル（現存）</li> <li>○フランス大使館増改築（増築部鉄筋コンクリート）（滅失） RC</li> </ul>		
昭和 9	1934	<ul style="list-style-type: none"> <li>○川崎守之助邸（滅失） RC 住宅</li> <li>○赤星鉄馬邸（現存） RC 住宅</li> <li>○聖母学院体育館及び講堂（滅失） RC</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○築地本願寺（伊東忠太）</li> </ul>	
昭和 10	1935	<p>「Antonin Raymond:his work in Japan 1920-1935/アントニン・レイモンド作品集」が出版される。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○聖パウロ軽井沢教会（現存）</li> <li>○福井菊三郎別邸（滅失） RC</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○土浦亀城自邸（土浦亀城）</li> </ul>	
昭和 11	1936	<p>雑誌「THE ARCHITECTURAL RECORD」1936年1月号に、コンクリート建築に関する論説・自身のコンクリート造の作品（赤星鉄馬邸を含む）を発表する。</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>○落水荘（フランク・ロイド・ライト） RC</li> </ul>
昭和 12	1937	<ul style="list-style-type: none"> <li>○東京女子大学礼拝堂及び講堂（現存） RC</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○東京帝室博物館（渡辺仁） RC</li> </ul>	
昭和 13	1938	<p>アメリカに帰国 「Antonin Raymond Architectural Details 1938」（レーモンド建築詳細図集）が出版される。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○スリ・オーロビンド・ゴーズ僧院宿舎（現存） RC</li> </ul>		

昭和 14	1939	ニューヨークに事務所を開設 ニューホープに農場を購入		○ニューヨーク万博フィンランド館（アルヴァ・アアルト）
昭和 16	1941	東京事務所閉鎖 アメリカに長期帰国		
昭和 22	1947		○前川國男自邸（前川國男）	
昭和 23	1948	再来日		
昭和 25	1950		建築基準法制定	○ファーンズワース邸
昭和 26	1951	麻布・笄町に自邸及び事務所完成  ○リーダーズ・ダイジェスト東京支社（滅失） RC ○日本楽器製造東京支店（滅失） ○笄町の自邸（滅失） 住宅	○神奈川県立近代美術館（坂倉準三）	○ユニテ・ダビタシオン（ル・コルビュジエ） RC ○レイクショア・ドライブのアパート（ミース・ファン・デル・ロー）
昭和 27	1952	アメリカ建築家協会の名誉会員に選出される リーダーズ・ダイジェスト東京支社ビルディングが日本建築学会賞を受賞		
昭和 29	1954	○安川電機本社ビル（講堂部分現存） RC		○ロンシャンの教会（ル・コルビュジエ） RC
昭和 30	1955	○カトリック聖アンセルモ目黒教会（現存） RC	○広島平和記念資料館（丹下健三） RC	
昭和 31	1956	○日本聖公会聖オルバン教会（現存）		○グッゲンハイム美術館（フランク・ロイド・ライト）
昭和 32	1957			○ラ・トゥーレットの修道院（ル・コルビュジエ）
昭和 33	1958		○香川県庁舎（丹下健三） RC ○スカイハウス（菊竹清訓） RC	○シーグラム・ビル（ミース・ファン・デル・ロー）
昭和 34	1959	○国際基督教大学（ICU）総合計画 ○立教高等学校総合計画		

昭和 35	1960	○国際基督教大学 (ICU) 図書館（現存） RC ○門司ゴルフクラブ (現存) RC ○イラン大使館（現存） RC		
昭和 36	1961	○群馬音楽センター (現存) RC ○聖十字教会（現存） ○聖ミカエル教会 (現存) ○南山大学総合計画	○東京文化会館（前川國男）	
昭和 37	1962		○軽井沢の山荘（吉村順三）	
昭和 38	1963	○立教学院聖パウロ 礼拝堂（鉄骨鉄筋 コンクリート造） (現存) ○山葉ホール（滅失） ○東京ゴルフクラブ クラブハウス（現存） RC (2階は 木造)		
昭和 39	1964	黙三等旭日中綬章を 授与される ○松坂屋銀座店全面 改修（滅失）	○東京カテドラル（丹下 健三） RC ○国立競技場（丹下健三）	○リチャーズ・メディカル・リサーチ・センター (ルイス・カーン) RC
昭和 40	1965	南山大学が日本建築 学会賞を受賞 日本建築家協会終身 会員となる ○カトリック新発田 教会（現存） ○立教小学校礼拝堂 及び講堂（現存） RC		
昭和 41	1966	○神言神学院（現存） ○上智大学六号館（滅失） RC · 七号館 (現存)	○パレスサイドビル（日 建設計）	
昭和 42	1967	論文集「私と日本建築」が出版される		
昭和 47	1972		○中銀カプセルタワービ ル（黒川紀章）	○キンベル美術館（ル イス・カーン） RC

昭和 48	1973	自伝 「Antonin Raymond: An Autobiography」が出版される 日本を去り、ニューホープへ戻る		○シドニー・オペラハウス（ヨルン・ウツソン）
昭和 51	1976	逝去		
昭和 55	1980	ノエミ・レーモンド逝去		

### 【建築作品凡例】

**RC** : RC 造(計画のみや内装のみのものは除く)

**住宅** : 住宅(計画のみや内装のみのものは除く)

## (7)ノエミ・レーモンドについて

ノエミ・ペルネサン（後のノエミ・レーモンド）は、1891年、フランス・カンヌに生まれた。コロンビア大学でファインアートを学んだ後、1910年にニューヨークでグラフィックデザインのスタジオを開き、ポスター、広告等を手がけた。

1914年にアントニン・レーモンドと結婚した直後は、新聞に漫画を描いたり、劇場のポスターを描いたりといった仕事を行った。アントニンは建築事務所を辞め、プロとして絵を描くため、アトリエを構えていたが、「自由時間のほとんどをソファで過ごし、失われてしまった絵のためのインスピレーションを見つけようとしていた」という状態だった。ノエミやその家族・友人が彼を経済面・精神面で支えたことが読み取れる。

ノエミの親友がフランク・ロイド・ライトのパートナーであるミリアム・ノエルと知り合いであったことから、紹介を受け、1916年にはアントニンとともにライトの下で木版・彩色の仕事を行った。1920年には、帝国ホテルに用いられることとなる装飾デザイン画を製作している。

アントニンの独立後は、その事務所にてインテリア・家具・テキスタイル等を担当するようになった。設計の際、内装は現場に同行するノエミに任せていたという<sup>37</sup>。インテリアデザインについて、アントニンは「外部と内部は一体化したものであり、したがってインテリア・デザインは技術と同様、建築家の領域を十分に占めるべきものである。」としている<sup>38</sup>。また、ノエミの仕事ぶりに関して、杉山雅則は、色彩については非常に厳しかったとしている<sup>39</sup>。

1941年には、ニューヨーク近代美術館「オーガニックデザインの家具コンペ」プリント布地のカテゴリーで入賞、「ワンルームのアパートのための家具」で佳作を受賞している。受賞作は、サイラス・クラーク社から少量発売とされた<sup>40</sup>。

アントニンとともに昭和48(1973)年にアメリカへ帰国し、ニュー希望のスタジオにて、昭和55(1980)年に逝去した。

<sup>37</sup> 「昭和初期モダニスト回顧録 レーモンド事務所の思い出 杉山雅則氏に聞く」(『SD 第286号』(鹿島出版会、1988))

<sup>38</sup> アントニン・レーモンド著・三沢浩訳『自伝 アントニン・レーモンド(新装版)』(鹿島出版会、2007)、296p

<sup>39</sup> 三沢浩「A・レーモンドのモダニズム：その設計作法」(神奈川県立近代県立美術館 太田泰人、三本松倫代編集『建築と暮らしの手作りモダン アントニン&ノエミ・レーモンド』(Echelle-1/美術館連絡協議会、2007)

<sup>40</sup> 鈴木敏彦、飯田昂平、北澤興一、杉原有紀、齋藤さだむ「アントニン&ノエミ・レーモンドのトータルデザイン—ノエミ・レーモンドの果たした役割を中心に—」(住総研 研究論文集 No.43、2016年版)

## (8) 杉山雅則について

杉山雅則は、大正10(1921)年～昭和16(1941)年にレーモンド事務所に勤務し、旧赤星鉄馬邸を担当した。ほかにも、靈南坂の自邸や東京女子大学礼拝堂・講堂等、レーモンド事務所における鉄筋コンクリート造の建物を多く担当している。

昭和16(1941)年以降は三菱地所設計に勤務し、丸の内再開発事業などに携わった。第二次世界大戦後は、レーモンドと三菱地所設計の双方から請われて、一時期は両事務所で半日ずつ勤務したこともあるという。三菱地所設計には昭和35(1960)年に退職後も昭和58(1983)年頃まで嘱託で在籍し、デザイン面をリードしたとされる。

レーモンドは杉山を「非常に優れた建築家」と評している<sup>41</sup>。

なお、杉山は一時期武蔵野市吉祥寺南町に居住していた。

## (9) 庭園活用の変遷

### 1) 赤星家在住時代(戦前)

設計図面の配置図では、建物・テラス付近や、南側に計画されていた付属屋、南側敷地境界に植栽が描き込まれているが、中央部分には描き込みが見られない。

旧赤星鉄馬邸に居住していた赤星鉄馬の長女の子（孫）へのヒアリングでは、南側の庭園の様子について、子ども時代はバンカーを知らず、砂場と見ており、大きくなつてから気がついたとしつつ、「芝と植木、芝生とバンカーとそれで木が植わっている」、

「広々とした芝生にバンカーと小山」とされている。当時の芝やバンカー（砂地）、樹木の配置を正確に把握することは難しいが、航空写真や古写真からある程度土地の起伏や芝の有無がわかり、ティーグラウンドやグリーンと推測できる平坦な芝生、バンカーと推測できるくぼ地になった砂地、現在も残っているモミジやヒノキ等の樹木などが確認できる。竣工当初は庭がゴルフの練習にも使われていたとする研究・著述もある<sup>42</sup>。

また、古写真からは、旧赤星鉄馬邸南側のテラス部分と庭園部分には、現況よりも高低差があったと推測できる。ただし、それらの痕跡は複数回の改変により現況では確認することができない。

前述のヒアリングによると、敷地東西側にはケヤキ等の高木が並び、敷地南側には竹藪があったとされる。旧赤星鉄馬邸北側には、設計図（配置図）によると附属屋（建物名記載なし）、車庫、ガソリン庫、倉庫が計画されていたが、実際に竣工したかどうかは不明である。

テラスの藤棚は竣工当初の写真では確認できず、居間・食堂前にはオーニングが設置されていた。竣工後の写真を比較すると、竣工後の早い時期には日本間前に藤棚が設け

<sup>41</sup> 「また、杉山雅則は第二次大戦の始まる時まで私の所にいたが、戦時中、デザイナーとして三菱地所に入り、引き続き現在に至っている。彼は非常に優れた建築家となり、三菱地所で設計した多くのビルや、新宿の洋裁学校の丸い建物などでよく知られている。」（アントニン・レーモンド著・三沢浩訳『自伝 アントニン・レーモンド（新装版）』（鹿島出版会、2007）、134p）

<sup>42</sup> 玄田悠大、米森公彦、竹内雄一、永野真義、中島直人「文化財として未認知のモダニズム建築にみられる保全敬称プロセスに関する一考察 —アントニン・レーモンド設計「旧赤星鉄馬邸」を対象として—」（日本建築学会計画系論文集第87巻第793号、2022年3月、668-679p）、与那原恵『歴史に消えたパトロン—謎の大富豪、赤星鉄馬』（中央公論新社、2024年）

られ、その後、オーニング支柱も利用して藤棚が計画されたと推測される<sup>43</sup>。また、赤星家居住時代に藤棚の前で撮影された写真が存在することがわかっている。

---

<sup>43</sup> 現在、藤棚の支柱は8本あるが、「THE Architectural record」1936年1月号等の古写真から、オーニングの支柱は居間・食堂前（南面東側）の5本だった。藤棚の支柱のうち東から5本目まではオーニングの痕跡と考えられる留め具のようなものがついていることからも、東側の5本はオーニングの支柱を再利用したと考えられる（本計画第3章参照）。

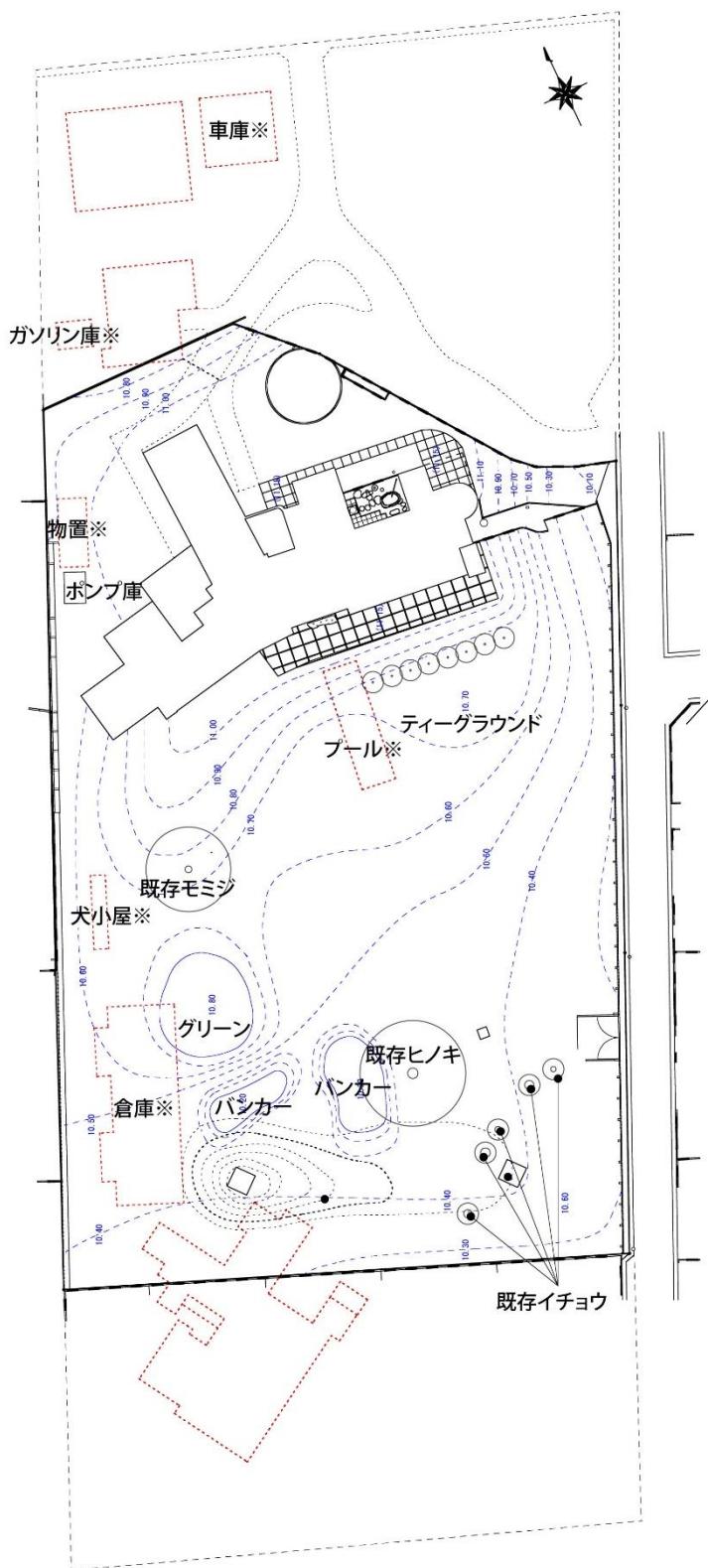


図1-9 1934(竣工後)～1944年の庭の地盤高想定  
(赤点線は設計図面に記載のある現存しない建造物の形状および位置とする。青点線は古写真からの推測による地盤高想定とした。)

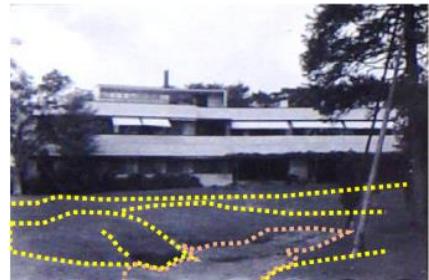


図1-10 竣工後の様子  
(黄色は起伏が見てとれる箇所、オレンジは砂地に見える箇所)



図1-11 1945年8月3日撮影航空写真  
(国土地理院所蔵米軍撮影空中写真をトリミング)

## 2) GHQ 接收時代(戦後)

第二次世界大戦後 GHQ により接收された際、庭園に改変が加えられたと考えられる。接收解除後の図面（配置図）からは、庭園には新規の噴水が置かれ、それを中心に園路のようなものがつくられたことが読み取れる。

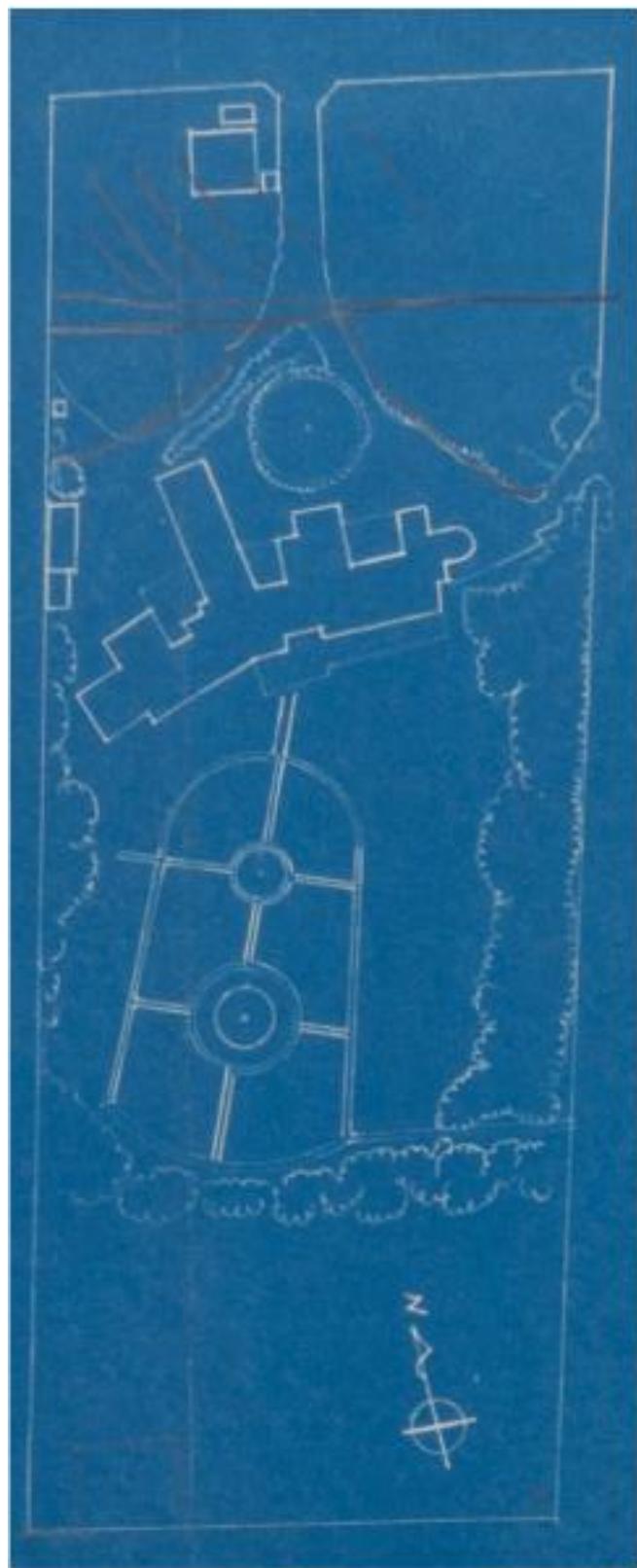


図 1-12 接收解除時状況 配置図  
(「小木曾邸建築平面図 接收解除時状況 1/100」に記載された配置図)

### 3)修道女会時代

昭和 31(1956)年のカトリック・ナミュール・ノートルダム修道女会による取得後には、あずまや（現存せず）、花壇の設置、水飲み場の移設などが行われた。また、平成 8(1996)年に敷地内の樹木が保存樹木に指定された。

修道女会取得後、初期には所属者が修練に励む静かな空間として使われていたが、1960年代に、カトリック全体の動向として、より積極的に外とつながりを持つことが奨励されるようになったことをきっかけに、地域の子どもたちが庭で遊べるようにしたり、クリスマスパーティー等を開いてクッキーを配ったりと地域に開かれるようになつた時期もあったという<sup>44</sup>。



図 1-13

修道女会取得後比較的早い時期の庭の様子。植栽、噴水などはGHQ 接収期の様子に近いと考えられる。

(ノートルダム清心女子大学所蔵)



図 1-14

1971～72 年頃の庭の様子。芝生と土の境を石で縁取っており、居住者と思われる人物がのびのびと過ごす様子が写っている。

(ノートルダム清心女子大学所蔵)

<sup>44</sup> カトリック・ナミュール・ノートルダム修道女会ヒアリング、ノートルダム清心女子高等学校卒業生ヒアリングより

## (10) 文化財等の価値

### 1) 国登録有形文化財意見具申所見「赤星鉄馬邸の価値」の記述(抜粋)

赤星鉄馬邸はアントニン・レーモンドが戦前に設計したコンクリート打ち放しの大規模住宅で、現存する唯一のものである<sup>45</sup>。自邸で試行していたコンクリート打ち放しの可能性を追求する近代国際様式（インターナショナルスタイル）から日本建築に影響を受け自然環境との融合をめざした初期モダニズムの代表的な住宅である<sup>46</sup>。設計において重要な前庭も現存しており、住宅建築では失われることが多いノエミ夫人の造作<sup>47</sup>が良好に遺存している<sup>48</sup>点も特筆される。このため、登録有形文化財基準の「造形の規範となっているもの」に該当するものと考えられる。

### 2) 文化財登録原簿に登録した際の特徴・評価

成蹊大学の南に広大な敷地を構えた実業家邸宅で、建築家レーモンド設計。中央で屈曲した東西に長い中廊下型平面で、前庭側外観は水平連続窓とする。キャノピーを差し出した玄関にはスリットを入れた曲面壁の階段室を構え、コンクリート造形の可能性を追求。

### 3) 文化財(建造物)としての価値

#### ①歴史的価値

- ・アントニン・レーモンド自身が初めて自らの建築スタイルを実現できたとする「靈南坂の自邸」（1926年）から8年後の建築で、自身の建築スタイルを確立した時期の作品といえる。戦前から戦後にかけて日本のモダニズム建築の旗手として数多くの著名な建築作品を残したレーモンドを理解する上で重要である。
- ・レーモンド作品における初期モダニズム建築<sup>49</sup>の中でも、モダニズム建築と日本の建築様式との融合を試みている時期の代表的な建築である。
- ・戦後に打ち出されるレーモンドの5原則（「直截性」、「単純性」、「経済性」、「自然主義」、「民主的な建築」）の萌芽がみられ、レーモンドの戦後の建築にもつながるものとして重要である。例えば、建築主（赤星鉄馬一家）の生活に合わせ、家族や使用人の空間、防犯等必要な機能を取り入れた全体の構成に「直截性」、装飾を排し、経済性も考慮した打放しコンクリートの壁面に「単純性」、既存の敷地形状や樹木を過度に損なわない庭に「自然主義」につながる考え方をみてとることができる。
- ・アントニンおよびノエミ・レーモンドは、協働して、建物のみならず家具、テキスタイル、照明器具などまで統一性のあるデザインをしていた（トータルデザイン）。旧赤星鉄馬邸では、ノエミ・レーモンドが担当した造り付け家具が状態よく残っている。

<sup>45</sup> 戦前のレーモンドの打放しコンクリートによる大規模住宅として、靈南坂の自邸、旧赤星鉄馬邸のほかに赤星喜介邸（1932年竣工）、川崎守之助邸（1934年竣工）、福井菊三郎邸（1936年竣工）があったが、現存しない。

<sup>46</sup> 三沢浩「A・レーモンドのモダニズム：その設計作法」（神奈川県立近代県立美術館 太田泰人、三本松倫代編集『建築と暮らしの手作りモダン アントニン&ノエミ・レーモンド』（Echelle-1/美術館連絡協議会、2007）

<sup>47</sup> ノエミ・レーモンドについては本章第3節（7）に記載。

<sup>48</sup> 造作家具自体が健全であることに加え、当初の状態を示す資料（設計図、古写真）が残っていることも重要な要素である。資料からも、レッドウッドベニヤ等オリジナルの材が現存していることが確認できる。

<sup>49</sup> 国登録有形文化財意見具申所見より。

- ・旧赤星鉄馬邸には、インテリアやテキスタイルを担うノエミ・レーモンド、戦前の事務所内でナンバーワンの弟子といわれ、後に三菱地所設計で丸の内の再開発等に携わる杉山雅則らが携わった。前川國男、吉村順三など、日本の建築史に名を残す優れた建築家を輩出する設計事務所の作品としても重要である。

### ②意匠的価値

- ・レーモンドの日本建築に関する考え方を反映し、施主が日本式・西洋式双方の生活様式（二重生活）を実現できるよう工夫された設計である。日本でこうした二重生活の考え方方が注目され、好意的に受け取られるようになってきた当時の時代の様相を理解しつつレーモンドならではの提案を示したもので、主人、家族、使用人の生活空間を分けつつ、家族が建物と庭との一体感を味わえるよう配慮した平面プラン、3つの中庭の設置、芯外しの開口の設け方、和室の配置、和服、洋服、日用品など和洋が混在する生活用品の存在に配慮しつつ、統一感を持たせた造り付けの家具等にその特徴が表れている。
- ・庭園と建物の連続性を、インナーバルコニーと特徴的なサッシによって実現し、建物内から外、外から内の見え方にも配慮が行き届いた設計である。また、設計において重要な庭園が残っている。

### ③技術的価値

- ・曲面の外壁を打放しコンクリートで仕上げており、当時世界でも先端の技術であった。
- ・レーモンドは、「靈南坂の自邸（1926年竣工）」で初めて壁面に打放しコンクリートを取り入れた。旧赤星鉄馬邸はその8年後の竣工で、現存するレーモンドのコンクリート打放しの大規模住宅の中では最も古く、戦前のものでは現存する唯一の例である。

## 4)武蔵野市における重要性

### ①武蔵野町、特に吉祥寺地域の発展初期の歴史や景観が継承されている

- ・成蹊学園の創設に寄与し成蹊学園初代理事長である岩崎小弥太と鉄馬は深い親交があり、鉄馬は子供たちを成蹊学園に通わせるため当地に転居してきた。震災後東京市の郊外が拡大していく中、都心部に近接しながら田園的な自然環境にも恵まれた立地特性を生かし、学園都市や別荘地として発展した頃の吉祥寺地域の歴史を象徴している。
- ・同時代の旧濱家住宅西洋館や、レーモンド設計の東京女子大学礼拝堂（杉並区）、国際基督教大学図書館本館・礼拝堂・教員住宅（三鷹市）、元町民の山本有三記念館（三鷹市）等、貴重な近代建築が近隣地域にあり、本市のみならず武蔵野地域の歴史を効果的に伝えることが可能である。
- ・戦災やその後の高度経済成長期の開発にもかかわらず、武蔵野町の発展初期の景観や、武蔵野地域の屋敷林を想起させる環境が残されている。また、武蔵野村初期によく見られた短冊状敷地が分割されながらも、その間口や南北の奥行が残されている点でも稀有である。

- ・吉祥寺地域の発展初期の景観を残すオープンスペースであり、本市の公園空白地域にあることも貴重である。

## ②文化財と庭園の一体的活用により市民等のつながりが広がる素地が大きい

- ・地域住民や文化人に長年親しまれてきた場所であり、修道女会所有時代には、野口雨情から吉祥寺を紹介され成蹊学園付近に移り住んだ金子光晴が前庭によく訪れていた。
- ・建物が市の所有となってからも、一般公開や市民ワークショップ、社会実験の運営に多くの市民が主体的に関わってきた。
- ・個性的な飲食店等の集中を特色とする吉祥寺駅徒歩圏内に立地しており、地域の事業者と協働して建築的価値の高い建物と庭園を一体的に活用した幅広い活動することが可能である。人が集まり新たな関係性が生まれ、本地域の都市文化を継承し発展させていく拠点としてのポテンシャルが高い。

## 4. 文化財等保護の経緯

### (1) 保存・活用履歴

旧赤星鉄馬邸の主な保存・活用の履歴を下表に示す。

修繕・改变等の内容や年代は、主として改修工事の記録、当初設計図および竣工直後の写真と現況の比較、カトリック・ナミュール・ノートルダム修道女会所蔵の古写真をもとにまとめたものである。

なお、建築物のみならず庭園との一体性に価値があるため、庭園についても主なものを見ますが、詳細は第3章を参照されたい。

年代		所有者等		旧赤星鉄馬邸の主な修繕・改变等 <sup>50</sup>		
和暦	西暦	所有者	居住者	内容		
大正 13	1924	赤星鉄馬	赤星鉄馬	<ul style="list-style-type: none"> <li>・赤星鉄馬が土地を購入</li> <li>・カントリーハウスが建てられる</li> </ul>		
昭和 9	1934			旧赤星鉄馬邸 竣工		
時期詳細不明				<ul style="list-style-type: none"> <li>・竣工後早い時期に居間・食堂前のオーニングが藤棚に変更される</li> <li>・長女が結婚に伴って南側の土地を譲り受け、長女の夫が家を建てる</li> </ul>		
昭和 12	1937			<ul style="list-style-type: none"> <li>・北側に長男宅が建つ（後に次男宅となる（年代不明だが、長男猪一一家が昭和 15(1940)年に挑戦に移り住んだことから、その頃と推測できる））</li> </ul>		
昭和 19	1944	赤星鉄馬 ・ 親族	日本陸軍？	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本陸軍が接收（旧赤星鉄馬邸は戦火の被害なし）</li> </ul>		
昭和 20	1945		進駐軍	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進駐軍が接收</li> </ul>		
昭和 27	1952			<ul style="list-style-type: none"> <li>・接收解除時、一部の造り付け家具、可動式家具が持ち去られる<sup>51</sup></li> </ul>		
昭和 28	1953	親族 <sup>52</sup>				
昭和 31	1956	修道女会	修道女会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カトリック・ナミュール・ノートルダム修道女会が取得</li> </ul>		

<sup>50</sup> 現存する部屋名は国登録有形文化財申請書類の平面図、現存しない部屋名は該当する部屋の設置時（設計時または改修時）の図面に基づいて表記する。

<sup>51</sup> 「たとえば赤星邸にいた司令官は、造りつけの寝台や家具を好んでいたため、移動の時簡単にとり外して持ち去ってしまった。心をこめてデザインされた家具、敷物、吊物などのほとんどが損害をうけ、こわされ、占有者の気の向くままにはずされもしたのである。」（アントニン・レーモンド著・三沢浩訳『自伝 アントニン・レーモンド（新装版）』（鹿島出版会, 2007）191p）

<sup>52</sup> 接收返還時の図面には「小木曾邸」と記されている。また、赤星鉄馬の孫へのヒアリングでは、カトリック・ナミュール・ノートルダム修道女会が取得する直前には清野主（鉄馬の妻の兄）が住んでいたとされた。同修道女会所有資料にもそれを裏付ける記述がある。

昭和 36	1961		<ul style="list-style-type: none"> <li>・屋上階屋根の撤去、3階の増築： Study,Dormitory,Office,Bath 等を増築</li> </ul>
時期詳細不明 (昭和 30 年～ 昭和 54 年 (1955 年～ 1979 年) のいずれか)			<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本間 1 の東側壁面の開口部(扉)を撤去、棚を追加</li> <li>・子供室 1 ・子供室 2 に固定壁を追加</li> <li>・執事室・応接室の開口部(扉)を固定壁に改変</li> <li>・日本間 2 床の間の壁の仕上げをクロス貼りに改変</li> <li>・台所中央の戸棚の撤去</li> <li>・外壁を塗装</li> </ul>
昭和 51	1976		<ul style="list-style-type: none"> <li>・敷地北側西(以前の三男宅の位置)に集合住宅が建つ</li> </ul>
昭和 54	1979		<ul style="list-style-type: none"> <li>・敷地内(旧赤星鉄馬邸南側)に修室棟を増築</li> <li>・子供室 4 から修室棟につながる廊下の増築</li> <li>・旧赤星鉄馬邸北側平屋木造部分(女中室、倉庫、Service entrance)解体及び礼拝棟の増築</li> <li>・旧赤星鉄馬邸中庭(中央)から礼拝棟につながる廊下を増築</li> <li>・屋上：3階の解体、物干し場・手すり新設</li> <li>・外壁改修：アクリルリシン(ホワイトベージュ)吹付け</li> <li>・洗濯室に流しを取付</li> <li>・台所床暖房の新設、床材をタイル貼りからクッションフロアシート(ラバー付き)に変更、既存戸棚、食品庫棚の撤去、フード側壁及び流し台前にオイルペイント塗り &amp; 100 角タイル(白)貼り替え、壁および天井にオイルペイント塗り、西面湯沸かし器の移設、既存スチールサッシ撤去およびアルミサッシ引き違いカバー工法に改修</li> <li>・応接室の壁をビニールクロス貼りとする</li> <li>・洗濯室に物入を追加</li> <li>・洗濯室に棚を追加</li> <li>・書斎の北面棚にガラスを追加</li> <li>・パントリーステンレスシンク、台の張り替え</li> <li>・天井のペンキを塗り替え</li> <li>・床(便所および小部屋)：長尺シート貼り</li> </ul>

				<ul style="list-style-type: none"> <li>・襖：布張りに変更</li> <li>・木製造作扉：修復・塗装</li> <li>・コンクリートブロック製ポンプ室：解体</li> <li>・庭物置小屋：解体</li> <li>・水槽架台：解体</li> </ul>
平成 8	1996			敷地内的一部樹木が保存樹木に指定される
平成 27	2015			南側の長女の土地だった部分が赤星家親族の所有を離れる
令和 3	2021	武藏野市	-	旧赤星鉄馬邸、寄贈により武藏野市取得 3月に保存樹木の指定解除
令和 4	2022			国登録有形文化財（建造物）に登録 一般公開
令和 5	2023			ニワボシプロジェクト：社会実験、一般公開（春）
令和 6	2024			旧赤星鉄馬邸オーブンガーデン、一般公開（春）
令和 7	2025			旧赤星鉄馬邸一般公開（春） <b>最終稿で令和 7 年度の全実績を記入予定</b>

なお、詳細な時期は不明であるが、2階インナーバルコニーを部屋に改修している。カトリック・ナミュール・ノートルダム修道女会の購入直後の写真ではすでに部屋となっていることから、同会の取得以前または取得後早い時期の改修と考えられる。

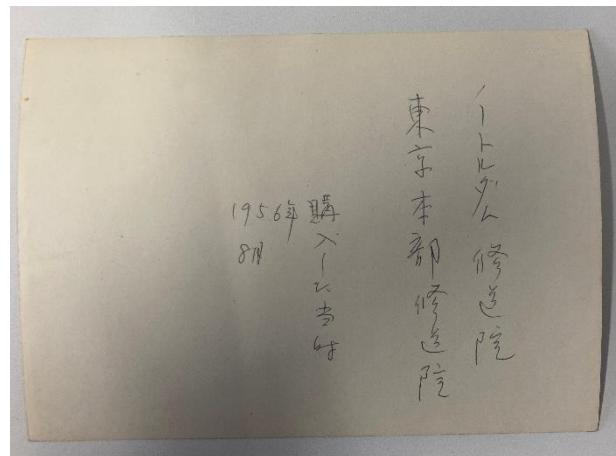


図 1-15(左、写真表)・図 1-16(右、写真裏)

裏面に「購入した当時 1956 年 8 月」との書き込みがある写真  
(ノートルダム清心女子大学所蔵)

## 5. 保護の現状と課題

### (1) 保存の現状と課題

建物の躯体は、令和6（2024）年度に一部の雨漏りの補修を行ったほかは、概ね健全とみられる。今後は、文化財的価値に配慮しつつ、最新の防水仕上げを施すほか、定期的な点検等を行い、長きにわたって良い状態を保つよう、活用方策と連動して保存管理の方針を立てていく必要がある。

また、令和3年度に実施した耐震診断（第二次診断）において、1階の居間・食堂において局所的に構造上弱い部分があり耐震補強が必要であるという結果になった。

庭園は、全体として、カトリック・ナミュール・ノートルダム修道女会時代から丁寧に手入れされており、多数の旧保存樹木で囲まれた空間が特徴的である。

旧赤星鉄馬邸竣工の頃からあると考えられる樹木もみられるが、樹木の中には健康状態や道路・隣地等との位置関係、密度の問題から、建物や周辺に危険を及ぼすおそれのあるものもみられる。適切な剪定、伐採・補植等の整備が必要である。

外構のコンクリート塀がよく残っており、一部は文化財の範囲に含まれている。一部に劣化もみられるため、耐震診断や今後の活用方法をもとに整備する必要がある。

### (2) 活用の現状と課題

令和5年度には、利活用に関する有識者会議において、保存活用計画策定に向けて保存・復原、利活用に関する基本的な考え方や、計画策定において検討すべき点等を整理した。

また、期間限定の建物・庭園の一般公開や社会実験、出張型の説明・意見聴取（オープンハウス）、アンケート等を実施し、近隣の良好な住環境と調和する利活用方法を検討している。

- ①一般公開・利活用に関するアンケート（令和4年10月）
- ②市民ワークショップ（令和5年1月～令和5年7月）
- ③一般公開ウィーク（令和5年度～令和7年度）
- ④関係者・団体へのインタビュー（令和5年1月～2月）
- ⑥WEBアンケート（令和5年3月～11月）
- ⑦オープンハウス（令和5年度）
- ⑧社会実験（オープンガーデン）（令和5年度～令和6年度）
- ⑨試行的管理運営業務委託（令和6～7年度）
- ⑩オープンハウス（令和7年度）

様々な取組を行う中で、今後活用するには、冷暖房器具や、バリアフリー設備、庭園を公園とする場合の公園施設等を、各室や庭園の用途、動線計画等にあわせて整備する必要があることが明らかになっている。

## 6. 計画の概要

### (1) 計画区域

庭園を含む敷地全体を計画区域とする。

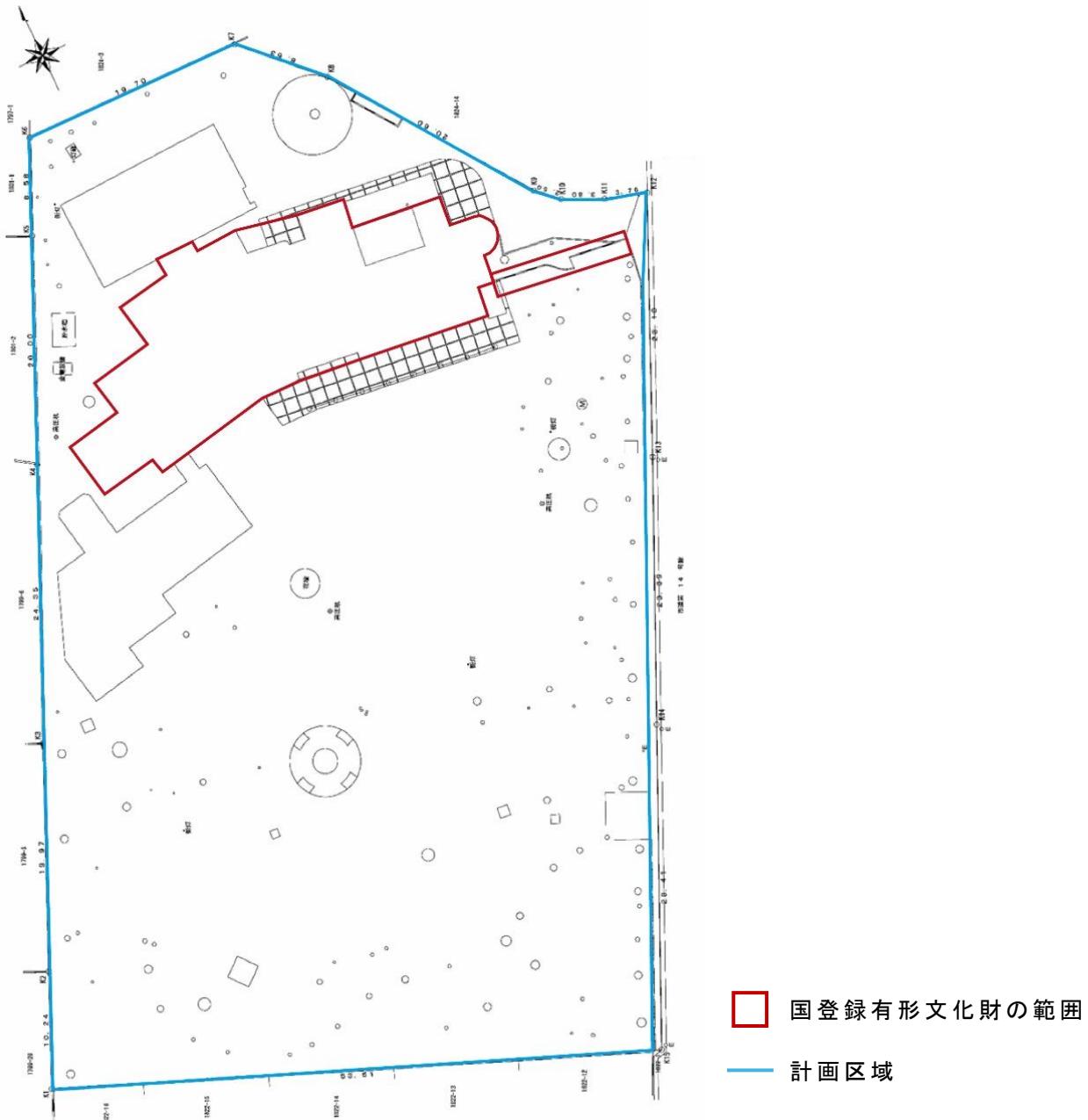


図 1-17 計画区域

### (2) 計画の目的

旧赤星鉄馬邸の保存・活用を円滑に促進するため、現状と課題を把握し、保存・活用を図るために必要な事項や、所有者・管理責任者・管理団体が自主的に行うことのできる範囲等を明らかにするとともに、管理・運営に関する枠組みを定めることを目的とする。

### (3) 計画策定の基本方針

- 公園空白地域にある良好な環境を公園として残す観点から市が土地の取得を決定した経緯より、登録有形文化財建造物の旧赤星鉄馬邸だけでなく、庭園を含めて一体的に検討する。
- 近年建設費が高騰していることに留意して検討を行う。
- 保存活用計画の策定における検討事項は、「旧赤星鉄馬邸の利活用に関する有識者会議」の経過を踏まえることとする。

【「旧赤星鉄馬邸の利活用に関する有識者会議」における保存・復元、利活用に関する考え方（引用）】

- ①旧赤星邸のオリジナル部分は原則として保存する。
- ②アントニン・レーモンドの設計意図である建物と庭、部屋同士のつながりを重視して竣工時の開口部や間取りなどの復元を目指す。
- ③旧赤星邸に耐震改修等する場合もオリジナルを損なわないよう最小限とする。
- ④増築部分は活用の想定や庭と中からの景観を配慮し解体や減築も含めた検討を行ったうえで改修等を行う。
- ⑤多くの世代に魅力を伝える仕組みとして、住環境や歴史的な文化財に配慮しながら日常的に使える工夫をする。
- ⑥歴史等の展示は詳細な調査を行ったうえで、今後の利用の中で体験できるような「生きた」展示となるよう見え方も含めて検討する。
- ⑦樹木診断の結果を踏まえつつ中央の広がりと周りに大きな樹木があるというフレームを重視して庭園整備を行う。

- 保存活用計画策定と並行して行う社会実験や一般公開などの実施結果を利活用や運営管理手法の検討の参考にする。

### (4) 計画の内容と構成

文化庁による「重要文化財（建造物）保存活用標準計画の作成要領」に準じ、以下の構成とする。

#### 1) 計画の概要（第1章）

計画作成年月日・作成者、旧赤星鉄馬邸（国登録有形文化財）と庭園の概要、文化財保護の経緯、現状と課題、計画の概要をまとめること。

#### 2) 「保存管理計画」（第2章）

旧赤星鉄馬邸の保存・管理の現状を明らかにした上で、部分（屋根、外壁壁面、各部屋等の単位）・部位（部材等の単位）ごとの保護の方針を定める。

また、管理計画（管理の体制・方法等）修理計画（当面必要な維持修理の措置と、今後の保存修理計画）をまとめること。

### **3)「環境保全計画」(第3章)**

文化財と一体的な保全を図る計画区域（第1章で定める）における、環境保全の現状と課題を明らかにした上で、環境保全の基本方針、区域の区分および区分ごとの保全の方針、区域内にある文化財以外の建造物の保護や修景、撤去等の方針を定める。

また、防災上の課題と対策、環境保全のために必要な施設整備や周辺樹木の管理について記載する。

### **4)「防災計画」(第4章)**

備えるべき災害として、火災（犯罪によるものも含む）、地震、落雷について、保存と活用の両面から課題を整理し、対策と防災の方針をまとめる。

### **5)「活用計画」(第5章)**

建物及び公園（庭園）のこれまでの活用の経緯を整理し、今後の公開・活用計画をまとめる。

関連計画や周辺地域・関係者との連携、その他関係行政機関との調整等の条件を整理し、予定する活用方法に沿った建築計画および外構や公園（庭園）の整備計画、併せて実施する復原整備の計画を記載する。

また、建物及び公園（庭園）の管理・運営計画をまとめる。

### **6)「保護に係る諸手続き」(第6章)**

前述の計画に盛り込まれた具体的な行為を行う上で、文化財保護法その他の関係法令の規定に従い、とるべき手続きをまとめる。

### **7)資料編**